

大和路・信濃路

堀辰雄

青空文庫

樹下

その藁^{わら}屋^や根^ねの古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小^こ徑^{みち}のかたわらに、
一体の小さな苔^{こけ}蒸^むした石仏が、笹むらのなかに何かしおらしい姿
で、ちらちらと木洩れ日に光って見えている。いずれ観音像かな
にかだろうし、しおらしいなどとはもつてのほかだが、——いか
にもお粗末なもので、石仏といつても、ここいらにはざらにある
脆^{もろ}い焼石、——顔も鼻のあたりが欠け、天衣^{てんね}などもすつかり磨滅
し、そのうえ苔がほとんど半身を被^{おお}つてしまっているのだ。右手

を頬にあてて、頭を傾かしげているその姿がちよつとおもしろい。一種の思惟象しゆいぞうとでもいうべき様式なのだろうが、そんなむずかしい言葉でその姿を言いあらわすのはすこしおかしい。もうすこし、何んといったらいいか、無心な姿勢だ。それを拝しながら過ぎる村人たちだつて、彼等の日常生活のなかでどうかした工合でそういった姿勢をしていることもあるかも知れないような、親しい、なにげなきなのだ。……そんな笹むらのなかの何んでもない石仏だが、その村でひと夏を過ごしているうちに、いつかその石仏のあるあたりが、それまで一度もそういったものに心を寄せたことのない私にも、その村での散歩の愉たのしみのひとつになった。ときどきそこいらの路傍から採ってきたような可憐な草花が二つ三つ

その前に供えられてあることがある。村の子供らのいたずららしい。が、そんなのではない、もうすこしちゃんとした花が供えられ、お線香なども上がっていたことも、その夏のあいだに二三度あった。

「お寺の裏の笹むらのなかに、こう、ちよつとおもしろい恰好かっこうをした石仏があるでしょう？ あれはなんでしょうか？」夏の末になつて、私はその寺のまだ四十がらみの、しかしもう鋭く瘦やせた住職からいろいろ村の話を聴いたあとで、そう質問をした。

「さあ、わたしもあの石仏のことは何もきいておりませんが、どういう由緒のものですか。かたちから見ますと、まあ如意輪にょいりんか観音んのんにちかいものかと思いますが。……何しろ、ここいらではちよつと類のないもので、おそらく石工がどこかで見覚えてきて、それを無邪気に真似でもしたのではないでしょうか？……」

「そういうこともあるんですか？　それはいい。……」私にはその説がすっかり気に入った。たしかに、その像をつくったものは、その形相の意味をよく知っていてそう造ったのではない。ただその形相そのものに対する素朴な愛好からそういうものを生んだのだ。そうしてその故に、——そこにまだわずかにせよ残っているかも知れない原初の崇高な形相にまで、私のようなものの心をあ

くがれしめるのであろうか？　こないかにもなにげない像ですら。……

「ときどきお花やお線香などが上がっているようですが、村の私たちはあの像にも何か特別な信仰をもっているのですか？」

最後に私はそんなこともきいてみた。

「さあ、それもいつごろからの事だか知りませんが、わり近三年頃になってからだそうですが、齒を病む子をつれて、村の年よりどもがよく拝みに来ます。」そういつてその住職は笑った。

「あの指先で頬を支えている思惟の相が、村びとにはなんのことやら分からなくなつて、いつかそんな俗信を生むようになったと見えませぬ。」

「それはいくら何んでも……」そう言いかけたが、しかしそのまま私は口をつぐんで、これから秋になって、夜ごとに虫がすだいて啼なきはじめるあの笹むらのなかで、相変らず、じいつと小さな頭を傾げているだろうその無心そうな像を、ふいと目のうちに蘇よみがえらせた。いつのまにこの像がこんなに自分にとって親しみのあるものになってしまったのだろうと訝いぶかりながら。……

それから数年立つて、私もときどき大和のほうへ出かけては、古い寺や名だかい仏像などを見て歩いたりするようになったが、

そんな旅すがら、路傍などによく見かける名もない小さな石仏の
ようなものにも目を止めるようにしていた。そういうものの中に
は私の心を惹く^ひようなものもかなりあるにはあつたが、数年前信
濃の山のべの村で見つけたあんなような味わいのあるものは一つ
も見出せなかつた。そして、私はときどきあの笹むらのなかで小
さな頭を傾げていた観音像を好んで思ひだしていた。もとより旅
にあつてはほどよく感傷的になるのも好いとおもっている私のこ
とだから、それが単なる自己の感傷に過ぎなくても、それもそれ
で好いとおもっていた。

云つてみれば、それはそれまで何年かその山ちかい村で孤独に
暮らしていた自分をもその一部とした信濃そのものに対する一種

のなつかしきでもあろうし、又、こうやって大和の古びた村々をひとりでさまよい歩いているいまの自分の旅すがたは旅すがたで、そんな数年前の何か思いつめていたような自分がそういったはかないものにまで心を寄せながら、いつかそれを通してひそかにあくがれていたものでもあったのであろう。ともかくも、その笹むらのなかの小さな思惟像は、何かにつけて、旅びとの私にはおもい出されがちだった。

或る秋の日にひとりで心ゆくまで拝してきた中宮寺ちゆうぐうじの観音像。

——その観音像の優しく力づよい美しさについては、いまさら私なんぞの何もいうことはない。ただ、この観音像がわれわれをかくも惹きつけ、かくも感嘆せしめずにはおかない所以ゆえんの一つは、その半跏思惟はんかしゆいの形相そのものであろうと説かれた浜田博士の闊かつた達つな一文は私の心をいまだに充たしている。その後も、二三の学者のこの像の半跏思惟の形の発生を考察した論文などを読んだりして、それがはるかにガンダラの樹下思惟像あたりから発生して来ているという説などもあることを知り、私はいよいよ心に充ちるものを感じた。

あのいかにも古アルカイック拙アラルなガンダラの樹下思惟像——仏伝のなかの、太子が樹下で思惟しゆいざんまい三昧の境にはいられると、その樹がおの

ずから枝を曲げて、その太子のうえに蔭をつくつたという奇蹟を示す像——そういう異様に葉の大きな一本の樹を装飾的にあしらつた、浅浮彫りの、数箇の太子思惟像の写真などをこの頃手にとつて眺めたりしているときなど、私はまた心の一隅であの信濃の山ちかい村の寺の小さな石仏をおもい浮かべがちだつた。

一つの思惟像しゆいぞうとして、冥想めいそうの頬杖ほぢぢやうをしている手つきが、いかにも無様ぶざまなので、村人たちには怪しい迷信をさえ生じさせていたが、——そのうえ、鼻は欠け落ち、それに胸のあたりまで一め

んに苔こけが生えていて、……そういえば、そんなにそれが苔づくほ
ど、その石仏のあるあたりは、どんな夏の日ざかりにもいつも何
かひえびえとしていて、そこいらまで来ると、ふいと好い気もち
になってひとりでに足も止まり、ついそのままその笹むらのな
かの石仏の上へしばらく目を憩やすわせる。と、苔の肌はしつとりと
している。ちよつとそれを撫でてみたくなるような見事さで。—
—そう、いまのいままでそれに気がつかなかつたのは、いや、気
がついていてもそれを何とも思わずにいたのは随分迂闊うかつだが、あ
そこは何かの大きな樹の下だったにちがいない。——すこし離れ
てみなければ、それが何んの樹だかも分からないほどの大きな樹
だったのだ。あの頬杖ほぢぢをしている小さな石仏のうえにちらちらし

ていた木洩れ日も、よほど高いところから好い工合に落ちてきていたので、あんなに私を夢み心地にさせたのだっただろう。

あれは一体、何んの樹だったのだろうか？……そんなことをおもいながら、私はふと樹下思惟という言葉を、その言葉のもつ云いしれずなつかしい心像を、身にひしひしと感じた。あれは一体、何んの樹？ ……だが、あの大きな樹の下で、ひとり静かに思惟にふけていたもの——それはあの笹むらのなかに小さな頭を傾かしげていた石仏だったろうか？ それとも、それに見入りながらその怪しげな思惟像をとおしてはるか彼方のものに心を惹ひかれていた私のほうではなかったらうか？

それにしても、あそこには、——あの何やらメルヘンめいた

石仏の前には、いまだにあの愚かな村びとどもの香花が絶えない
だろうか？ 子供たちがそこいらの路傍から摘んでくるかわいら
しい草花だけならいいが……

十月

一

一九四一年十月十日、奈良ホテルにて

くれがた奈良に著いた。僕のためにとっておいてくれたのは、かなり奥まった部屋で、なかなか落ちつけそうな部屋で好い。すこうし仕事をするのに僕には大きすぎるかなと、もうここで仕事に没頭している最中のような気もちになって部屋の中を歩きまわってみたが、なかなか歩き度がある。これもこれでよかろうという事にして、こんどは窓に近づき、それをあけてみようとして窓掛けに手をかけたが、つい面倒になって、まあそれくらいはあすの朝の楽しみにしておいてやれとおもって止めた。その代り、食堂にはじめて出るまえに、奮発して髭ひげを剃そることにした。

十月十一日朝、ヴェランダにて

けさは八時までゆっくりと寝た。あけがた静かで、寝心地はまことにいい。やつと窓をあけてみると、僕の部屋がすぐ荒池あらいけに面していることだけは分かったが、向う側はまだぼおつと濃い靄もやにつつまれているつきりで、もうちよつと僕にはお預けという形。なかなかもつたいぶつていやあがる。さあ、この部屋で僕にどんな仕事たのが出来るか、なんだかこう仕事を目の前にしながら嘘みたいに愉たのしい。きようはまあ軽い小手しらべに、ホテルから近い新薬師寺ぐらいのところでも歩いて来よう。

夕方、唐招提寺にて

いま、唐招提寺とうしょうだいじの松林のなかで、これを書いている。けさ

新薬師寺のあたりを歩きながら、「城門のくづれてゐるに馬酔木あしびかな」という秋桜子しゅうおうしの句などを口ずさんでいるうちに、急に矢やも楯たてもたまらなくなつて、此処こゝに来てしまった。いま、秋の日が一ぱい金堂や講堂にあたつて、屋根瓦やねがわらの上にも、丹にの褪さめかかつた古い円柱にも、松の木の影が鮮やかに映つていた。それがたえず風にそよいでいる工合は、いうにいわれない爽さわやかさだ。此処こゝこそは私達のギリシアだ——そう、何か現世にこせこせしながら生きてるのが厭いやになつたら、いつでもいい、ここに來て、半日なりと過すごしていること。——しかし、まず一番先きに、小説なんぞ書くのがいやになつてしまうことは請合まごいだ。……はつはつは、いま、これを読んでいるお前の心配そうな顔が目に見える

ようだよ。だが、本当のところ、此処にこうしていると、そんなはかない仕事にかかわっているよりか、いつそのこと、この寺の講堂の片隅に埃ほこりだらけになって二つ三つころがっている仏頭みたいな、自分も首から上だけになったまま、古代の日々を夢みていたくなる。……

もう小一時間ばかりも松林のなかに寝そべって、そんなはかないことを考えていたが、僕は急に立ちあがり、金堂こんどうの石壇の上に登って、扉の一つに近づいた。西日が丁度その古い扉の上にあたってゐる。そしてそこには殆ど色の褪めてしまった何かの花の大きな文様もようが五つ六つばかり妙にくつきりと浮かび出ている。そんな花文のそこに残っていることを知ったのはそのときがはじめ

てだった。いましがた松林の中からその日のあたっている扉のそのあたりになんだか綺麗な文様らしいものの浮き出ているのに気がつき、最初は自分の目のせいかと疑ったほどだった。——僕はその扉に近づいて、それをしげしげと見入りながらも、まだなんとなく半信半疑のまま、何度もその花文の一つに手でさわってみようとしかけて、ためらった。おかしなことだが、一方では、それが僕のこのとききりの幻であってくれればいいというような気もしていたのだ。そのうちその扉にさしていた日のかげがすうと立ち去った。それと一しよに、いままで鮮やかに見えていたそのいくつかの花文も目のまえで急にぼんやりと見えにくくなってしまった。

十月十二日、朝の食堂で

けさはもう六時から起きている。朝の食事をするまえに、大体こんどの仕事のプランを立てた。とにかく何処か大和の古い村を背景にして、IDYL 風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉集的な気分を漂わせたいものだとおもう。——ちよつと待った、お前は僕が何かというとすぐイデイルのようなものを書きたがるので、またかと思っていることだろう。しかし、本当をいうと、僕は最近ケーベル博士の本を読みかえしたおかげで、いままでいい加減に使っていたそのイデイルという様式概念をはじめではつきりと知ったのだよ。ケーベル博士によると、イデ

イルというのは、ギリシア語では「小さき絵」というほどの意だそう。そしてその中には、物静かな、小ぢんまりとした環境に生きている素朴な人達の、何物にも煩わせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されている。……どうだ、分かったかい、僕がそれより他にいい言葉がなかったので半ば間にあわせに使っていたイデイルというのが、思いがけず僕の考えていたものと同じくらいそのままなのだ。もうこれからは安心して使おう。いい訳語が見つかってくれればいいが（どうも牧歌なんぞと訳してしまっはまずいんだ）……

さて、お講義はこの位にしておいて、こんどの奴はどんな主題にしてやろうか。なんしろ、万葉風となると、はじめての領分な

のだから、なかなかおいそれとは手ごろな主題も見つかるまい。そのくせ、一つのを考え出そうとすると、あれもいい、これもちよつと描けそうだ、と一ぺんにいろんなものが浮かんで来てしまつてしようがない。

ままよ、きようは一日中、何処か古京のあとでもぶらぶら歩きながら、なまじつかこつちで主題を選ぼうなどとししないで、どいつでもいい、向うでもつて僕をつかまえるような工合にしてやろう。……

僕はそんな大おおよう様な気もちで、朝の食事をすませて、食堂を出た。

午後、海竜王寺にて

天平時代の遺物だというてがいもん転害門から、まず歩き出して、ほうれ法蓮んというちよつと古めかしい部落を過ぎ、僕はさもいい気もち
そうにさおじ佐保路に向い出した。

此処、佐保山のほとりは、その昔、——ざつと千年もまえには、大伴氏などが多く邸宅を構え、柳の並木なども植えられて、その下を往来するハイカラな貴公子たちに心ちのいい樹蔭をつくつていたこともあつたのだそうだけれど、——いまは見わたすかぎりぼうぼう茫々とした田圃たんぼで、その中をまっ白い道が一直線に突っ切つて
いるつきり。秋らしい日ざしを一ぱいに浴びながら西を向いて歩いて
いると、背なかが熱くなってきて苦しい位で、僕は小説など

をゆつくりと考えているどころではなかった。漸つと法華寺村に著いた。

村の入口からちよつと右に外れると、そこに海竜王寺かいりゆうおうじという小さな廃寺がある。その古い四脚門の陰にはいつて、思わずほつとしながら、うしろをふりかえつてみると、いま自分の歩いてきたあたりを前景にして、大和平やまとだいら一帯が秋の収穫を前にしていかにもふさふさと稲の穂波を打たせながら拡がっている。僕はまぶしそうにそれへ目をやっていたが、それからふと自分の立っている古い門のいまにも崩れて来そうなのに気づき、ああ、この明るい温かな平野が廃都の跡なのかと、いまさらのように考え出した。

私はそれからその廃寺の八重葎やえむぐらの茂つた境内にはいつて往つて、みるかげもなく荒れ果てた小さな西金堂さいこんどう（これも天平の遺構だそうだ……）の中を、はずれかかった櫺子れんじごしにのぞいて、その天平好みの化粧天井裏を見上げたり、半ば剥落はくらくした白壁の上に描きちらされてある村の子供のらしい楽書を一つ一つ見たり、しまいには裏の扉口からそつと堂内に忍びこんで、磚せんのすき間から生えている葎までも何か大事そうに踏まえて、こんどは反対に櫺子の中から明るい土のうえにくつきりと印せられている松の木の影に見入ったりしながら、そう、——もうかれこれ小一時間ばかり、此処でこうやって過いごしている。女の来るのを待ちあぐねている古いにしえの貴公子のようにわれとわが身を描いたりしながら。

……

夕方、奈良への帰途

海竜王寺を出ると、村で大きな柿を二つほど買って、それを皮ごとかじ嚙りながら、こんどは佐紀山らしい林のある方に向って歩き出した。「どうもまだまだ駄目だ。それに、どうしてこうおれは中世的に出来上がっているのだろう。いくら天平好みの寺だといつたって、こんな小つちやな寺の、しかもそのはいたい廃頽した気分、こんななにうつつを抜かしていたのでは。……こんな事では、いつまで立つても万葉気分にはいれそうにもない。まあ、せいぜい何処やらにまだ万葉の香りのうっすらと残っている伊勢物語風なも

のぐらいしか考えられまい。もつと思いきりうぶな、いきいきとした生活気分を求めなくつては。……」そんなことを僕は柿を噛り噛り反省もした。

僕はすこし歩き疲れた頃、やっと山裾の小さな村にはいった。
歌うたひめ姫あまという美しい字名だ。こんな村の名にしてはどうもすこし、とおもうような村にも見えたが、ちよつと意外だったのは、その村の家がどれもこれも普通の農家らしく見えないのだ。大きな門構えのなかに、中庭が広くとつてあつて、その四周に母屋も納屋も家畜小屋も果樹もならんでいる。そしてその日あたりのいい、明るい中庭で、女どもが穀物などを一ぱいに拵げながらのんびりと働いている光景が、ちよつとピサロの絵にでもありそうな構図

で、なんとなく仏蘭西フランスあたりの農家のような感じだ。

ちよつとその中にはいつて往つて、女どもと、その村の聞きとりにくいような方言かなんかで話がしてみたのだけれど、気軽にそんなことの出来るような性分ならいい。僕ときたひには、そうやって門の外からのぞいていると女どもにちらつと見とがめられただけで、もうそこには居たたまれない位になるのだからね。……

気の小さな僕が、そうやって農家の前に立ち止まり立ち止まり、二三軒見て歩いているうちに、急に五六人の村の子たちに立ちよられて、怪訝けげんそうに顔をじろじろ見られだしたのは往生した。

そのあげく、僕はまるでそんな村の子たちに追われるようにして、

その村を出た。

その村はずれには、おあつらえむきに、鎮守の森があつた、僕はどうとう追いつめられるように、その森のなかに逃げ込み、その木蔭でやつと一息ついた。

十月十三日、飛火野にて

きようは薄曇つているので、何処へも出ずに自分の部屋に引き籠こもつたまま、きのうお前に送ってもらつた本の中中から、希臘ギリシア悲ひげ劇集きしゅうをとりだして、それを自分の前に据え、別にどれを読み出すということもなしにあちらこちら読んでいた。そのうち突然、そのなかの一つの場面が僕の心をひいた。舞台は、アテネに近い、

或る村はずれの森。苦しい流浪の旅をつづけてきた父と娘との二人づれが漸つといまその森まで辿りついたところ。盲いた老人が自分の手をひいている娘に向つて、「此処はどこだ」と聞く。旅やつれのした娘はそれでも老父を慰めるようにこたえる。「お父様、あちらにはもう都の塔が見えます。まだかなり遠いようではございますが。ここでございますか、ここはなんだかこう神さびた森で。……」

老いたる父はその森が自分の終焉しゆうえんの場所であることを予感し、此処にこのまま止まる決心をする。

その神さびた森を前にして、その不幸な老人の最後の悲劇が起ろうとしているらしいのを読みかけ、僕はおぼえず異様な身ぶる

いをした。僕はしかしそのときその本をとじて、立ち上がった。

このまま此の悲劇のなかには入り込んでしまつては、もうこんどの自分の仕事はそれまでだとおもつた。……

こういうものを読むのは、とにかくこんどの可哀らしい仕事ですんでからでなくては。——そう自分に言つてきかせながら、僕はホテルを出た。

もう十一時だ。僕はやっぱりこちらに來ているからには、一日のうちには何か一つぐらいいいものを見ておきたくなつて、博物館にはいり、一時間ばかり彫刻室のなかで過ごした。こんなときにひとつ何か小品で心愉こころのしいものをじっくり味わいたいと、小型の飛鳥あすかぶつ仏などを丹念に見てまわっていたが、結局は一番ながい

こと、ちようど若い樹木が枝を拵げるような自然さで、六本の腕を一ぱいに拵げながら、何処か遙かなところを、何かをこらえているような表情で、一心になって見入っている阿修羅王あしゅらおうの前に立ち止まっていた。なんというういしい、しかも切ない目ざしだろう。こういう目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示しているのだろう。

それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させていると、自分のうちにおのずから故しれぬ郷愁のようなものが生れてくる、——何かそういったノスタルジックなものさえ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない気もちになって、やつとのこととで、その彫像をうしろにした。そ

れから中央の虚空蔵菩薩こくぞうぼさつを遠くから見上げ、何かこらえるように、黙ってその前を素通りした。

夜、寢床の上で

とうとう一日中、薄曇っていた。午後もまたホテルに閉じこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフォクレエスの悲劇を再びとりあげて、ずっと読んでしまった。

この悲劇の主人公たちはその最後の日まで何んという苦患くげんに充ちた一生を送らなければならないのだろう。しかも、そういう人間の苦患の上には、なんの変ることもなく、ギリシアの空はほがらかに拡がっている。その神さびた森はすべてのものを吸い込ん

でしまうような底知れぬ静かさだ。あたかもそれが人間の悲痛な呼びかけに対する神々の答えでもあるかのよう。――

薄曇ったまま日が暮れる。夜も、食事をすますと、すぐ部屋にひきこもって、机に向う。が、これから自分の小説を考えようとすると、果して午後読んだ希臘悲劇ギリシアひげきが邪魔をする。あらゆる艱か苦んくを冒して、不幸な老父を最後まで救おうとする若い娘のりりしい姿が、なんとしても、僕の心に乗ってきてしまう。自分も古代の物語を描こうというなら、そういう気高い心をもった娘のすがたをこそ捉まえようと努力しなくては。……

でも、そういうもの、そういった悲劇的なものは、こんどの仕事事がすんでからのことだ、こんど、こちらに滞在在中に、古い寺や

仏像などを、勉強かたがた、僕が心愉こころのしく書こうというのには、やはり「小さき絵」位がいい。

まあ、最初のプランどおり、その位のものを心がけることにして、僕は万葉集をひらいたり埴輪はにわの写真を並べたりしながら、十二時近くまで起きていて、五つか六つぐらい物語の筋を熱心に立ててみたが、どれもこれも、いざ手にとって仔細しさいに見ていると、大へんな難物のように思えてくるばかりなので、とうとう観念して、寢床にはいった。

十月十四日、ヴェランダにて

ゆうべは少し寐ねられなかった。そうして寐ねられぬまま、仕事の

ことを考えているうちに、だんだんいくじがなくなってしまうた。もう天平时代の小説などを工夫するのは止めた方がいいような気がしてきた。毎日、こうして大和の古い村や寺などを見ていたからって、おいそれとすぐそれが天平时代そのままの姿をして僕の中に蘇よみがえってくれるわけではないのだもの。それには、もうすこし僕は自分の土台をちゃんとしておかなくては。古代の人々の生活の状態なんぞについて、いまみたいにほんの少ししか、それも殆ど切れ切れにしか知っていないようでは、その上で仕事をするのがあぶなつかしくってしょうがない。それは、ここ数年、何かと自分の心をそちらに向けて勉強してきたこととしてきた。だが、あんな勉強のしかたでは、まだまだ駄目なことが、いま、こうやっ

てその仕事に実地にぶつかって見て、はつきり分かったというものだ。ほんの小手しらべのような気もちでとり上げようとした小さな仕事さえ、こんなに僕を手きびしくはねつけるのだ。僕はそのままそれに抵抗していても無駄だろう。いさぎよく引っ返して、勉強し直してきた方がいい。……

そんな自棄やけぎみな結論に達しながら、僕はやっと明け方になってから寐入った。

それで、けさは大いに寐坊をして、髭ひげも剃そらずに、やっと朝の食事に間に合った位だ。

きようはいい秋あき日和びよりだ。こういうすがすがしい気分になると、又、元気が出てきて、もう一日だけ、なんとか頑張つてやろうと

いう気になった。やや寐不足のようだが、小説なんぞ考えるのは、そういう頭の状態の方がかえって幻覚的でいいこともある。

どうも心細い事を云い初めたものだ、お前もこんな手紙を見ては気が気でないだろう。だが、もう少し辛抱をして、次ぎの手紙を待っていてくれ。何処でそれを書く事になるか、まだ僕にも分からない。……

午後、秋篠寺にて

いま、あきしのでら秋篠寺という寺の、秋草のなかに寐そべって、これを書いている。いましがた、ここのすこし荒れた御堂にある伎芸ぎげいて天女んによの像をしみじみと見てきたばかりのところだ。このミユウ

ズの像はなんだか僕たちのもののような気がせられて、わけても
お慕わしい。朱い髪あかをし、おおどかな御顔だけすつかり香こうにお灼や
けになって、右手を胸のあたりにもちあげて軽く印を結ばれなが
ら、すこし伏せ目にこちらを見下ろされ、いまにも何かおっしや
られそうな様子をなすってお立ちになっていられた。……

此処はなかなかいい村だ。寺もいい。いかにもそんな村のお寺
らしくしているところがいい。そうしてこんな何気ない御堂のな
かに、ずっと昔から、こういう匂いの高い天女の像が身をひそま
せていてくださったのかとおもうと、本当にありがたい。

夕方、西の京にて

秋篠の村はずれからは、生駒山いこまやまが丁度いい工合に眺められた。もうすこし昔だと、もつと侘わびしい村だったろう。何か平安朝の小さな物語になら、その背景には打ってつけに見えるが、それだけに、此処もこんどの仕事には使えそうもないとあきらめ、ただ伎芸天女と共にした幸福なひとときをきようの収穫にして。僕はもう何をしようというあてもなく、秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往って見ようかと思ったりした。

が、道がいつか川と分かれて、ひとりでさいだいじに西大寺駅に出たので、もうこれまでと思いついて、奈良行の切符を買ったが、ふいと気がかわって郡山行の電車に乗り、西の京で下りた。

西の京の駅を出て、薬師寺の方へ折れようとするにつつきに、

小さな切符売場を兼ねて、ふるがわら古瓦のかけらなどを店さきに並べた、侘びしいこつとうてん骨董店がある。いつも通りすがりに、ちよつと気になって、その中をのぞいて見るのだが、まだ一ぺんもはいつて見たことがなかった。が、きようその店の中に日があかるくさしこんでいるのを見ると、ふいとその中にはいつてみる気になった。何か埴輪でくの土偶のようなものでもあつたら欲しいと思つたのだが、そんなものでなくとも、なんでもよかつた。ただふいと何か仕事の手がかりになりそうなものがそんな店のがらくたの中にあるが、つていはすまいかという空頼みもあつたのだ。だが、そこで二十分ばかりねばつてみていたが、からくさもよう唐草文様などの工合のいい古瓦のかけらの他にはこれといつて目ぼしいものも見あたらなかつた。

なんぼなんでも、そんな古瓦など買った日には重くって、持てあ
ますばかりだろうから、又こんど来ることにして、何も買わずに
出た。

裏山のかげになって、もうここいらだけ真先きに日がかげつて
いる。薬師寺の方へ向つてゆくと、そちらの森や塔の上にはまだ
日が一ぱいにあたっている。

荒れた池の傍をとおつて、講堂の裏から薬師寺にはいり、金堂
や塔のまわりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪そうりんを見上げ
て、その水煙すいえんのなかに透かし彫すほりになって一人の天女の飛翔ひしようし
つつある姿を、どうしたら一番よく捉まえられるだろうかと角度
など工夫してみていた。が、その水煙のなかにそういう天女を彫

り込むような、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどきの人間の工夫しようとしてる事なんぞは何んと間が抜けていることだと気がついて、もう止める事にした。

それから僕はもと来た道を引返し、すっかり日のかげった築いじみち土道を北に向って歩いていった。二三度、うしろをふりかえつてみると、松林の上にその塔の相輪だけがいつまでも日に赫かがやいていた。

裏門を過ぎると、すこし田圃たんぼがあつて、そのまわりに黄いろい粗あらかべ壁の農家が数軒かたまっている。それが五ご条じょうという床しい字名あざなの残っている小さな部落だ。天平の頃には、恐らくここいらが西の京の中心をなしていたものと見える。

もうそこがすぐ唐招提寺の森だ。僕はわざとその森の前を素どおりし、南大門なんだいもんも行き過ぎて、なんでもない木橋の上に出ると、はじめてそこで足を止めて、その下に水草を茂らせながら気もちよげに流れている小川にじいつと見入りだした。これが秋篠川のつづきなのだ。

それから僕は、東の方、そこいら一帯の田圃たんぼごしに、奈良の市のあたりにまだ日のあたっているのが、手にとるように見えるところまで歩いて往つてみた。

僕は再び木橋の方にもどり、しばらくまた自分の仕事のことなど考え出しながら、すこし気が鬱ふさいで秋篠川にそうて歩いていたが、急に首をふつてそんな考えを払い落し、せつかくこちらに来

ていて随分ばかばかしい事だと思ひながら、裏手から唐招提寺の森のなかへはいつていった。

金堂こんどうも、講堂も、その他の建物も、まわりの松林とともに、すっかりもう陰つてしまつていた。そうして急にひえびえとした夕暗のなかに、白壁だけをあかるく残して、軒も、柱も、扉も、一様に灰ばんだ色をして沈んでゆこうとしていた。

僕はそれでもよかつた。いま、自分たち人間のはかなさをこなに心にしみて感じていられるだけでよかつた。僕はひとりで金堂の石段にあがつて、しばらくその吹き放ふはなしの円柱のかけを歩きまわつていた。それからちよつとその扉の前に立つて、このまえ来たときはじめて気がついたいくつかの美しい花文かもんを夕暗のなか

に捜して見た。最初はただそこいらが数箇所、何か剥はげてでも
しまった跡のような工合にしか見えないでいたが、じいつと見て
いるうちに、自分がこのまえに見たものをそこにいま思い出して
いるのに過ぎないのか、それともそれが本当に見え出してきたの
か、どちらかよく分からない位のほの灰かさで、いくつかの花文がそ
こにぼおつと浮かび出していた。……

それだけでも僕はよかった。何もしないで、いま、ここにこう
しているだけでも、僕は大へん好い事をしているような気がした。
だが、こうしている事が、すべてのものがはかなく過ぎてしまう
僕たち人間にとって、いつまでも好いことではあり得ないことも
分かっていた。

僕はきようはもうこの位にして、此処を立ち去ろうと思いがら、最後にちよつとだけ人間の気まぐれを許して貰うように、円柱の一つに近づいて手で撫でながら、その太い柱の真んなかのエントサシスの工合を自分の手のうちにしみじみと味わおうとした。僕はそのときふとその手を休めて、じつと一つとところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍った。そうやってみると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのりと温かい。その太い柱の深部に滲^しみ込^こんだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残っているらしい。

僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅^かいでみた。日なたの匂いまでもそこには幽^{かす}かに残っていた。……

僕はそうやって何んだか気の遠くなるような数分を過ごしていたが、もうすっかり日が暮れてしまったのに気がつくのと、ようやくと金堂から下りた。そうして僕はその儘、まま自分の何処かにまだ感ぜられている異様な温かみと匂いを何か貴重なもののようにかかえながら、既に真っ暗になりだしている唐招提寺の門を、いかにもさりげない様子をして立ち出でた。

二

十月十八日、奈良ホテルにて

きょうは雨だ。一日中、雨の荒池をながめながら、折口博士の

「古代研究」などを読んでいた。

そのなかに人妻となつて子を生んだ葛くずの葉はという狐の話を取り上げられた一篇があつて、そこにこういう挿話が語られている。或る秋の日、その葛の葉が童子をあやしなから大好きな乱菊の花の咲きみだれているのに見とれていいるうちに、ふいと本性に立ち返つて、狐の顔になる。それに童子が気がつき急にこわがつて泣き出すと、その狐はそれつきり姿を消してしまふ、ということになるのだが、その乱菊の花に見入つていいるその狐のうっとりとした顔つきが、何んとも云えず美しくおもえた。それもほんの一とおりの美しさなんぞではなくて、何かその奥ぶかくに、もつともつと思いがけないものを潜めていいるようにさえ思われてならな

った。

僕も、その狐のやつに化かされ出しているのではないが：

：

十月十九日、戒壇院の松林にて

きようはまたすばらしいあきびより秋日和だ。午前中、クロオデルの

「マリアへのお告げ」を読んだ。

数年まえの冬、雪に埋もれた信濃の山小屋で、孤独な気もちで読んだものを、もう一遍、こんどは秋の大和路の、何処かあかるい空の下で、読んでみたくて携えてきた本だが、やっとそれを読むのにいい日が来たわけだ。

雪の中で、いまよりかずつと若かつた僕は、この戯曲を手にし
ながら、そこに描かれている一つの主題——神的なもの人間
性のなかへの突然の訪れといったようなもの——を、何か一枚の
中世風な受胎告知図を愛するのように、素朴に愛していることがで
きた。いまも、この戯曲のそういう抒情的な美しさはすこしも減
じていない。だが、こんどは読んでいるうちにいつのまにか、そ
の女主人公ヴィオレエヌの惜しげもなく自分を与える余りの純真
さ、そうしているうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げ
られてゆく驚き、その心の葛藤^{かっとう}、——そういったものに何か胸
をいっばいにさせ出していた。

三時ごろ読了。そのまま、僕は何かじつとしていられなくなつ

て、外に出た。博物館の前も素どおりして、どこへ往くということもなしに、なるべく人けのない方へ方へと歩いていった。こういうときには鹿なんでもまっぴらだ。

かいだんいん 戒壇院をとり囲んだ松林の中に、誰もいないのを見すますと、漸やつと其処に落ちついて、僕は歩きながらいま読んできたクロオデルの戯曲のことを再び心に浮かべた。そうしてこのカトリックの詩人には、ああいう無垢むくな処女を神へのいけにえにするために、ああも彼女を孤独にし、ああも完全に人間性から超絶せしめ、それまで彼女をとりまいていた平和な田園生活から引き離すことがどうあつても必然だったのであろうかと考えて見た。そうしてこの戯曲の根本思想をなしているカトリック的なもの、ことにその

結末における神への讚美のようなものが、この静かな松林の中で、僕にはだんだん何か異ことさま様なものにおもえて来てならなかった。

がっこうぼさつぞう

月光菩薩像

。そのまえにじつと立っていると、いましがたま

三月堂の金堂にて

で木の葉のように散らばっていたさまざまな思念ごとそつくり、その白みがかった光の中に吸いこまれてゆくような気もちがせられてくる。何んという慈いつくしみの深さ。だが、この目をほそめて合掌をしている無心そんな菩薩の像には、どこか一いちまつ抹の哀愁のよななものが漂っており、それがこんなにも素直にわれわれを此の像に親しませるのだという気するのは、僕だけの感じであろう

か。
……

一日じゆう、たえず人間性への神性のいどみのようなものに苦
しませられていただけ、いま、この柔かな感じの像のまえにこう
して立っている、そういうことがますます痛切に感ぜられてく
るのだ。

十月二十日夜

きようははじめて生駒山を越えて、河内の国高たか安やすの里のあたりを歩いてみた。

山の斜面に立った、なんとなく寒ざむとした村で、西の方には
ずっと河内の野が果てしなく拡がっている。

ここから二つ三つ向うの村には名だかい古墳群などもあるそうだが、そこまでは往つて見なかつた。そうして僕はなんの取りとめもないその村のほとりを、いまは山の向う側になつて全く見えなくなつた大和の小さな村々をなつかしそうに思い浮かべながら、ほんの一時間ばかりさまよつただけで、歸つてきた。

こないだ秋篠の里からゆうがた眺めたその山の姿になにか物語めいたものを感じていたので、ふと気まぐれに、そこまで往つてその昔の物語の匂いをかいできただけのこと。（そうだ、まだお前には書かなかつたけれど、僕はこのごろはね、伊勢物語なんぞの中にもこつそりと探りを入れているのだよ。……）

夕方、すこし草臥くたびれてホテルに歸つてきたら、廊下でばったり

小説家のA君に出逢った。ゆうべ遅く大阪からこちらに著^つき、きようは法隆寺へいって壁画の模写などを見てきたが、あすはまた京都へ往くのだといっている。連れがふたりいた。ひとりはその壁画の模写にたずさわっている奈良在住の画家で、もうひとは京都から同道の若き哲学者である。みんなと一しよに僕も、自分の仕事はあきらめて、夜おそくまで酒場で駄^だ弁^べっていた。

十月二十一日夕

きようはA君と若き哲学者のO君とに誘われるがままに、僕も朝から仕事を打^う棄^ちて、一しよに博物館や東大寺をみてまわった。

午後からは〇君の知っている僧侶の案内で、ときおり僕が仕事のことなど考えながら歩いた、あの小さな林の奥にある戒壇院かいだんいんの中にもはじめてはいることができた。

がらんとした堂のなかは思ったより真つ暗である。案内の僧があけ放してくれた四方の扉からも僅かしか光がさしこんでこない。壇上の四隅に立ちはだかつた四天王の像は、それぞれ一すじの逆光線をうけながら、いよいよ神々しさを加えているようだ。

僕は一人きりいつまでも広こころもくてん目天てんの像のまえを立ち去らずに、そのまゆねをよせて何物かを凝視している貌かおを見上げていた。なにしろ、いい貌だ、温かदैて烈はげしい。……

「そうだ、これはきつと誰か天平時代の一流人物の貌をそっくり

そのまま模してあるにちがいない。そうでなくては、こんなに人格的に出来あがるはずはない。……」そうおもいながら、こんな立派な貌に似つかわしい天平びとは誰だろうか。なああと想像してみたりしていた。

そうやって僕がいつまでもそれから目を放さずにいると、北方の多聞たもんてん天の像を先刻から見ていたA君がこちらに近づいてきて、一しよにそれを見だしたので、

「古代の彫刻で、これくらい、こう血の温かみのあるのは少いよ。うな気がするね。」と僕は低い声で言った。

A君もA君で、何か感動したようにそれに見入っていた。が、そのうち突然ひとりごとのように言った。「この天邪鬼あまのじやくという

のかな、こいつもこうやって千年も踏みつけられてきたのかともうと、ちよつと同情するなあ。」

僕はそう言われて、はじめてその足の下に踏みつけられて苦しそうに悶もだえている天邪鬼に気がつき、A君らしいヒユウマニズムに頬笑みながら、そのほうへもしばらく目を落した。……

数分後、戒壇院の重い扉が音を立てながら、僕たちの背後に鎖とぎされた。再びあの真つ暗な堂のなかは四天王の像だけになり、其処には千年前の夢が急にいきいきと蘇よみがえり出していそうなのに、僕は何んだか身の緊しまるような気がした。

それから僕たちは僧侶の案内で、東大寺の裏へ抜け道をし、正倉院がその奥にあるという、もの寂びた森のそばを過ぎて、畑な

どもある、人けのない裏町のほうへ歩いていった。

と、突然、僕たちの行く手には、一匹の鹿が畑の中から犬に追
い出されながらも、凄^ひい速^いさで逃^にげてい^いった。そんな小^こさな葛^{かつと}
藤^うまでが、なにか皮肉な現代史の一場面のよう^うに、僕たちの目
に映^{うつ}った。

十月二十三日、法隆寺に向う車窓で

きのうは朝から一しよう懸命になつて、新規に小説の構想を立
ててみたが、どうしても駄目だ。きようは一つ、すべての局面転
換のため、最後のとつておき^おき^きにしていた法隆寺へ往^いつて、こ^こない
だホテルで一しよに話した画家のSさんに壁画の模写^もをして^いる

ところでも見せてもらって、大いに自分を発奮させ、それから夢^ゆめどの殿の門のまえにある、あの虚子の「斑^{いかるが}鳩物語」に出てくる、古い、なつかしい宿屋に上がって、そこで半日ほど小説を考えてくるつもりだ。

十月二十四日、夕方

きのう、あれから法隆寺へ行って、一時間ばかり壁画を模写している画家たちの仕事を見せて貰いながら過ごした。これまでも何度かこの壁画を見にきたが、いつも金堂のなかが暗い上に、もう何処もかも痛いたしいほど剥^{はくらく}落しているの、殆ど何も分からず、ただ「かべのゑのほとけのくににもあれにけるかも」など

という歌がおのずから口ずさまれてくるばかりだった。——それがこんど、金堂こんどうの中にはいつてみると、それぞれの足場の上で仕事をしている十人ばかりの画家たちの背ごしに、四方の壁に四仏浄土を描いた壁画の隅々までが蛍光灯のあかるい光のなかに鮮やかに浮かび上がっている。それが一層そのひどい剥落のあとをまざまざと見せてはいるが、そこに浮かび出てきた色調の美しいといったらない。画面全体にほのかに漂っている透明な空色が、どの仏たちのまわりにも、なんともいえず愉たのしげな雰囲気をかもし出している。そうしてその仏たちのお貌たのだの、宝冠てんねだの、天衣てんねだのは、まだところどころの陰などに、目のさめるほど鮮やかな紅だの、緑だの、黄だの、紫だのを残している。西域あたりの画

風らしい天衣などの緑いろの凹凸のぐあいも言いしれず美しい。東の隅の小壁に描かれた菩薩ぼさつの、手にしている蓮華れんげに見入っていると、それがなんだか薔薇ばらの花かなんそのような、幻覚さえおこつて来そうになるほどだ。

僕は模写の仕事の邪魔をしないように、できるだけ小さくなつて四壁の絵を一つ一つ見てまわっていたが、とうとうしまいに僕もSさんの櫓やぐらの上にあがりこんで、いま描いている部分をちかぢかと見せて貰った。そこなどは色もすっかり剥はげている上、大きな亀裂が稲妻形にできている部分で、そういうところもそっくりその儘ままに模写しているのだ。なにしろ、こんな狭苦しい櫓の上で、絵道具のいっぱい散らばった中に、身じろぎもならず坐つたぎり、

一日じゆう仕事をして、一寸平方位の模写しかできないそうだと
どうかすると何んにもない傷痕ばかりを描いているうちに一と月
ぐらいはいつのまにか立ってしまふこともあるという。——そん
な話を僕にしながら、その間も絶えずSさんは絵筆を動かしてい
る。僕はSさんの仕事の邪魔をするのを怖れ、お礼をいって、ひ
とりで櫓を下りてゆきながら、いまにも此の世から消えてゆこう
としている古代の痕をこうやって必死になってその儘に残そうと
している人たちの仕事に切ないほどの感動をおぼえた。……

それから金堂を出て、新しくできた宝蔵の方へゆく途中、子規
の茶屋の前で、僕はおもいがけず詩人のH君にひよつくりと出逢
った。ずっと新薬師寺に泊っていたが、あす帰京するのだそうだと

そうして僕がホテルにいますということを引きいて、その朝訪ねてくれたが、もう出かけたあとだったので、こちらに僕も来ているとは知らずに、ひとりで法隆寺へやって来た由。——そこで子規の茶屋に立ちより、柿など食べながらしばらく話しあい、それから一しよに宝蔵を見にゆくことにした。

僕の一番好きな百くだらかん済観音は、中央の、小ぢんまりとした明かるい一室に、ただ一体だけ安置せられている。こんどはひどく優遇されたものである。が、そんなことにも無関心そうに、この美しい像は相変らずあどけなく頬笑まれながら、静かにお立ちになつていられる。……

しかしながら、此のうら若い少女の細っそりとしたすがたをな

すつていられる菩薩像は、おもえば、ずいぶん数奇すきなる運命をもたれたもうたものだ。——「百済観音」というお名称も、いつ、誰がとなえだしたもののやら。が、その示すごとく古朝鮮などから将来せられたという伝説もそのまま素直に信じたいほど、すべてが遠くからきたものの異常さで、そのうつとりと下脹しもぶくれした頬のあたりや、胸のまえで何をそうして持っていたのだから忘れたしまつていような手つきの神々しいほどのうつつなさ。もう一方の手の先きで、ちよいと軽くつまんでいるきりの水すいびょう瓶びんなどはいまにも取り落しはすまいかとおもわれる。

この像はそういう異国のものであるというばかりではない。この寺にこうして漸やつと落ちつくようになったのは中古の頃で、そ

れまでは末寺の橘たちばなでら寺あたりにあつたのが、その寺が荒廢した後、此処に移されてきたのだらうといわれている。その前はどこにあつたのか、それはだれにも分からないらしい。ともかくも、流離というものを彼女たちの哀しい運命としなければならなかつた、古代の気だかくも美しい女たちのように、此の像も、その女身の美しさのゆえに、国から国へ、寺から寺へとさすらわれたかと想像すると、この像のまだうら若い少女のような魅力もその底に一種の犯し難い品を帯びてくる。……そんな想像にふけりながら、僕はいつまでも一人でその像をためつすがめつして見ていた。どうかすると、ときどき揺らいでいる瓔珞ようらくのかげのせいか、その口もとの無心そうな頬笑みが、いま、そこに漂ったばかりかの

ように見えたりすることもある。そういう工合なども僕にはなかなかありがたかった。……

それから次ぎの室で伎樂面ぎがくめんなどを見ながら待っていてくれたH君に追いついて、一しよに宝蔵を出て、夢殿のそばを通りすぎ、その南門のまえにある、大黒屋という、古い宿屋に往つて、昼食をとともにした。

その宿の見はらしのいい中二階になった部屋で、田舎らしい鳥料理など食べながら、新薬師寺での暮らしぶりなどをきいて、僕も少々うらやましくなった。が、もうすこし人並みのからだにしていからでなくては、そういう精進しょうじんぎんまい三昧はつづけられそうもない。それからH君はこちらに滞在中に、ちか頃になく詩がたくさ

ん書けたといつて、いよいよ僕をうらやましがらせた。

四時ごろ、一足さきに帰るといふH君を郡こおりやま山行きのバスのところまで見送り、それから僕は漸つとひとりになった。が、もう小説を考えるような気分にもなれず、日の暮れるまで、ぼんやりと斑鳩いかるがの里をぶらついていた。

しかし、夢殿の門のまえの、古い宿屋はなかなか哀れ深かった。これが虚子の「斑鳩物語」に出てくる宿屋。なにしろ、それはもう三十何年かまえの話らしいが、いまでもそのときとおなじ構えのようだ。もう半分家が傾いてしまっていて、中二階の廊下など歩くのもあぶない位になっている。しかしその廊下に立つと、見はらしはいまでも悪くない。大和の平野が手にとるように見える。

向うのこんもりした森が三輪山みわやまあたりらしい。菜の花がいちめんに咲いて、あちこちに立っている梨の木も花ざかりといった春さきなどは、さぞ綺麗だろう。と、何んということなしに、そんな春さきの頃の、一と昔まえのいかるがの里の若い娘のことを描いた物語の書き出しのところなどが、いい気もちになって思い出されてくる。——しかし、いまはもうこの里も、この宿屋も、こんなにすっかり荒れてしまっている。夜になったって、箴おさを打つ音で旅びとの心を慰めてくれるような若い娘などひとりもいまい。だが、きいてみると、ずっと一人きりでこの宿屋に泊り込んで、毎日、壁画の模写にかよっている画家がいるそうだ。それをきいて、僕もちよつと心を動かされた。一週間ばかりこの宿屋で暮ら

して、僕も仕事をしてみたら、もうすこしぴんとした気もちで仕事ができるかも知れない。

どのみち、きようは夢殿や中宮寺なんぞも見損ったから、またあすかあさつて、もう一遍出なおして来よう。そのときまでに決心がついたら、ホテルなんぞはもう引き払って来てもいい。……

そんな工合で、結局、なんにも構想をまとめずに、暗くなつてからホテルに帰つてくると、僕は、夜おそくまで机に向つて最後の努力を試みてみたが、それも空しかった。そうして一時ちかくなつてから、半分泣き顔をしながら、寢床にはいった。が、昼間あれだけ気もちよげに歩いてくるせい、よく眠れるので、愛想がつきる位だ。――

けさはすこし寝坊をして八時起床。しかし、お昼もきようはホテルでして、一日じゆう新らしいものに取りかかっていた。――

こないだ折口博士の論文のなかでもって綺麗だなあとおもった葛くずの葉はという狐の話。あれをよんでから、もつといろんな狐の話をよみたくなって、りよういき霊異記や今昔物語などを捜して買ってきてもったが、けさ起きしなにその本を手にとってみているうちに、そんな狐の話ではないが、そのなかの或る物語がふいと僕の目にとまった。

それは一人のふしあわせな女の物語。――自分を与え与えして
いるうちにいつしか自分を神にしていたようなクロオデル好みの
聖女とは反対に、自分を与えれば与えるほどいよいよはかない境

涯に墮おちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。——そういう物語の女を見いだすと、僕はなんだか急に身のしまるような気もちになつた。これならば幸さい先さいきがよい。そういう中世のなんでもない女を描くのなら、僕も無理に背のびをしなくともいいだろう。こんやもう一晚、この物語をとつくりと考えてみる。

ジャケット届いた。本当にいいものを送つてくれた。けさなどすこうし寒かつたので、一枚ぐらいジャケットを用意してくればよかつたとおもつていたところだ。こんやから早速著きてやろう。

十月二十四日夜

ゆうがた、浅茅あさぢらが原はらのあたりだの、ついじのくずれから菜畑なえなどの見えたりしている。高たか畑はたけの裏こみちの小径こみちだのをさまよいながら、きのうから念頭ねんとうを去らなくなった物語ものがたりの女のうえを考えつづけていた。こうして築土つじじのくずれた小径せうけいを、ときどき尾花おぼななどをかき分けるようにして歩いていると、ふいと自分のまえに女を捜している狩衣かりぎぬすがたの男が立ちあらわれそうな気がしたり、そうかとおもうとまた、何処どこかから女のかなしげにすすり泣く音がきこえて来るような気がして、おもわずぞつとしたりした。これならば好い。僕はいつなん時ときでも、このまますうつとその物語ものがたりの中なかにはいつてゆけそうな気がする。……

この分ぶんなら、このままホテルホテルにいて、ときどきここいらを散歩

しながら、一週間ぐらいで書いてしまえそうだ。

十月二十五日夜

けさちよつと博物館にいっただけで、あとは殆ど部屋とヴェランダとで暮らしながら、小説の構想をまとめた。構想だけはすっかり出来た。いま細部の工夫などを愉^{たの}しんでやっている。日暮れごろ、また高畑のほうへ往つて、ついじの崩れのあるあたりを歩いてきた。尾花が一めんに咲きみだれ、もう葉の黄ばみだした柿の木の間から、夕月がちらりと見えたり、三笠山の落ちついた姿が渋い色をして見えたりするのが、何んともいえずに好い。晩秋から初冬へかけての、大和路はさぞいいだろうなあと、つい小説

のほうから心を外^そらして、そんな事を考え出しているうちに、僕は突然或る決心をした。——僕はやはり二三日うちに、荷物はこのまま預けておいて、ホテルを引き上げよう。しかし、いかるがの宿に籠^こもるのではない。東京へ帰る。そうしておまえの傍で、心しずかにこの仕事に向い、それを書き上げてから、もう一度、十一月のなかば過ぎにこちらに来ようというのだ。そうして大和路のどこかで、秋が過ぎて、冬の来るのを見まもっていたい。都合がいたら、おまえも一しよにつれて来よう、どうもいまこうして奈良にいますと、一日じゅう仕事に没頭しているのが何んだかもったいなくなつて、つい何処かへ出かけてみたくなる。何処へいっても、すぐもうそこには自分の心を豊かにするものがあるの

だからなあ。しかし、昼間はそうやって歩きまわり、夜は夜で、落ちついてゆうべの仕事をつづけるなんという真似のできない僕のことだから、いつそのまま出来かけの仕事をもって東京へ帰った方がいいのではないか、とまあそんな事も一とおりは考えに入れたうえの決心なのだ。

僕はホテルに帰つてくると、また気のかわらないうちにとおもつて、すぐ帳場にそのことを話し、しあさつての汽車の切符を買つておいて貰うことにした。

十月二十六日、斑鳩の里にて

きょうはめずらしくのんびりした気もちで、汽車に乗り、大和

平をはすに横ぎって、佐保川に沿ったり、西の京のあたりの森だの、その中ほどにくつきりと見える薬師寺の塔だのをなつかしげに眺めたがら、法隆寺駅についた。僕は法隆寺へゆく松並木の途中から、村のほうへはいって、道に迷ったように、わざと民家の裏などを抜けたりしているうちに、夢殿の南門のところへ出た。そこでちよつと立ち止まって、まんまえの例の古い宿屋をしげしげと眺め、それから夢殿のほうへ向つた。

夢殿を中心として、いくつかの古代の建物がある。ここいらはうまやどのおうじ厩戸皇子の御住居のあとであり、向うのこんどう金堂や塔などが立ち並んでおのずから厳肅な感じのするあたりとは打つて變つて、大いになごやかな雰囲気を漂わせていてしかるべきいっかく一廊。――

だが、この二三年、いつ来てみても、何処か修理中であつて、まだ一度もこのあたりを落ちついた気もちになつて立ちもとおつたことがない。

いまだにそのまわりの伝法堂などは板がこいがされているが、このまえ来たとき無慙むざんにも解体されていた夢殿だけは、もうすっかり修理ができあがつていた。……

そこで僕はときどきその品のいい八角形をした屋根を見あげ見あげ、その小ぢんまりとした庭を往つたり来たりしながら、

ゆめどのはしづかなるかなものもひにこもりていまもましま
すがごと

義疏ぎそのふでたまたまおきてゆふかげにおりたたしけむこれの
ふるには

そんな「鹿鳴集」の歌などを口ずさんでは、自分の心のうちに、
そういった古代びとの物静かな生活を蘇よみがえらせてみたりしていた。

僕は漸ようやく心がしずかになってから夢殿のなかへはいり、秘仏を
拝し、そこを出ると、再び板がこいの傍をとおつて、いかにも虔つつ
ましげに、中宮寺の観音を拝しにいった。――

それから約三十分後には、僕は何か赫かがやかしい目つきをしながら、
村を北のほうに抜け出し、平群へぐりの山のふもと、法輪寺ほつりんじや法起寺ほつきじ
のある森のほうへぶらぶらと歩き出していた。

ここいら、古くはいかるがの里と呼ばれていたあたりは、その四囲の風物にしても、又、その寺や古塔にしても、推古時代の遺物がおおいせいか、一種蒼古な気分をもっているようにおもわれる。或いは厩戸皇子のお住まいになられていたのがこのあたりで、そうしてその中心に夢殿があり、そこにおける真摯しんしな御思索がそのあたりのすべてのものにまで知しらず識しらずのうち深い感化を与え出していたようなことがあるかも知れない。そうしてこのあたりの山や森などはもつとも早く未開状態から目覚めて、そこに無数に巣くっていた小さな神々を追い出し、それらの山や森を朝夕うちながめながら暮らす里人たちは次第に心がなごやかになり、生きていくことのよろこびをも深く感ずるようになりはじめてい

た。
……

そうだ、僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に仏教が渡来してきて、その新しい宗教に次第に追いやられながら、遠い田舎のほうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の佗わびしいうしろ姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流る謫たくの神々にいたく同情し、彼等をなつかしみながらも、新らしい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。なかなか好いものになりそうではないか。

行く手の森の上に次ぎ次ぎに立ちあらわれてくる法輪寺や法起寺の小さな古塔を目にしながら、そんな小説を考え考え、そこい

らの田圃たんぼの中を歩いてみると、僕はなんともいえず心なごやかな、いわばパストラアルな気分にはさえなり出していた。

十月二十七日、琵琶湖にて

けさ奈良を立つて、ちよつと京都にたちより、往きあたりばかりにはいった或る古本屋で、リルケが「ぼるとがる文」ふみなどと共に愛していた十六世紀のリヨンびとルイズ・ラベという薄倅の女詩人のかわいらしい詩集を見つけて、飛びあがるようになって喜んで、途中、そのなかで、

「ゆふべわが臥床ふしどに入りて、いましも甘き睡りに入らんとすれば、わが魂はわが身より君が方にとあくがれ出づ。しかるときは、わ

れはわが胸に君を搔きいだきゐるがごとき心ちす、ひねもす心も切に恋ひわたりゐし君を。ああ、甘き睡りよ、われを欺りてなりたばかとも慰めよ。うつつにては君に逢ひがたきわれに、せめて恋ひしき幻をだにひと夜与へよ。」という哀あいえん婉わんな一章などを拾い読みしたりしつゝ、午過ぎひる、やつと近江おうみの湖うみにきた。

ここで、こんどの物語の結末——あの不しあわせな女がこの湖のほとりでむかしの男と再会する最後の場面——を考へてから、あすは東京に帰るつもりだ。

いま、ちよつと近所の小さな村を二つ三つ歩いてきてみた。どこの人家の垣根にも、茶の花がしろじろと咲いていた。これで、昼の月でもほのかに空に浮かんでいたら満点だが。——

古墳

J兄

この秋はずつと奈良に滞在していましたが、どうも思うように仕事がかどらず、とうとうその仕事をかたづけけるためにしばらく東京に舞いもどっていました。それからすぐまたこちらに来るつもりでいましたが、すこし無理をして仕事をしたため、そのあとがひどく疲れて一週間ばかり寐^ねたり何かしているうちに、つい出そびれて、やっと十二月になってこちらに来たような始末です。

この七日にはどうしても帰京しなければならぬ用事がある上、
こんどはどうしても倉敷くらしきの美術館にいつてエル・グレコの「受
胎告知」を見てきたいので、奈良には三四日しかいられないこと
になりました。まるでこの秋ホテルに預けておいた荷物をとりに
だけきたような恰好かつこうです。

でも、そんな三四日だつて、こちらでもつて自分の好きなよう
に過ごすことができるのだとおもうと、たいへん幸福でした。僕
は一日の夜おそくホテルに著ついてから、さあ、あすからどうやっ
て過ごそうかと考え出すと、どうも往むつてみたいところが沢山あ
りすぎて困こつてしまいました。そこで僕はそれを二つの「方」に
分けて見ました。一つの「方」には、まだ往むつたことのない室生むろ

寺うじや聖林寺しょうりんじ、それから浄瑠璃寺じょうるりじなどがあります。もう一つの「方」は、飛鳥あすかの村々や山やまの辺べの道みちのあたり、それから瓶原みかのほらのふるさとなどで、そんないまは何んでもなくなっているようなところをぼんやり歩いてみたいとも思いました。こんどはそのどちらか一つの「方」だけで我慢することにして、その選択はあすの朝の気分にかかせることにして寐床ねどこにはいりました。……

翌朝、食堂の窓から、いかにも冬らしくすつきりした青空を見ていますと、なんだかもう此処こゝにこうしているだけでいい、何処どこにも出かけなくたっていいと、そんな欲のない気もちにさえなり出した位ですから、勿論、めんどくさい室生寺ゆきなどは断念しました。そうして十時ごろやっとホテルを出て、きょうはさ

しあたり山の辺の道ぐらいということにしてしまいました。三輪山の麓ふもとをすこし歩きまわってから、柿本人麻呂の若いころ住んでいたといわれる穴師あなしの村を見に纏向山まきむくやまのほうへも往つてみたりしました。このあたり一帯の山麓さんろくには名もないような古墳が群らがつているということを知っていたので、それでも見ようとおもっていたのだけれど、どちらに向つて歩いてみても、丘かみという丘が蜜柑畑みかんばたけで、若い娘たちが快活そうに唄い唄い、鋏はさみの音をさせながら蜜柑を採つていたのでした。何か南国的といたいたいほど、明るい生活気分にみちみちているようなのが、僕にはまったくおもしろいと思われました。——が、そういう蜜柑山の殆どすべてが、ことによつたら古代の古墳群のあとなのかも知れません。

そんな想像が僕の好奇心を少しくそそのかしました。

次ぎの日——きのうは、恭仁京くこのみやの址あとをたずねて、瓶原にいつて一日じゆうぶらぶらしていました。ここの山々もおおく南を向き、その上のほうが蜜柑畑になっていると見え、静かな林のなかなどを、しばらく誰にも逢わずに山のほうに歩いていけると、突然、上のほうから蜜柑をいっぱい詰めた大きな籠かごを背負った娘たちがきやつきやつといながら下りてくるのに驚かされたりしました。ながいこと山国の寒く瘦やせさらぼうたような冬にばかりなじんで来たせいか、どうしても僕には此処はもう南国に近いように思われてなりませんでした。だが、また山の林の中にひとりきりにされて、急にちかちかと見えだした鹿背山かせやまなどに向っていると、や

はり山べの冬らしい気もちにもなりました。……

きようは、朝のうちはなんだか曇つていて、急に雪でもふり出しそうな空合いでしたが、最後の日なので、おもいきつて飛鳥ゆきを決行しました。が、畝傍山うねびやまのふもとまで来たら、急に日がさしてきて、きのうのように気もちのいい冬日ふゆびよりになりました。三年まえの五月、ちょうど桐の花の咲いていたころ、君といつしよにこのあたりを二日つづけて歩きまわった折のことを思い出しながら、大体そのときと同じ村々をこんどは一人きりで、さも自分のよく知っている村かなんぞのような気やすさで、歩きまわつて来ました。が、帰りみち、途中で日がとつぷりと昏くれ、五条ごじょう野のあたりで道に迷つたりして、やっと月あかりのなかを岡寺の

駅にたどりつきました……

あすは朝はやく奈良を立って、一気に倉敷を目ざして往くつもりです。よほど決心をしてかからないことには、このままこちらでぶらぶらしてしまいそうです。見たいものはそれは一ぱいあるのですから。だが、こんどはどうあつても僕はエル・グレコの絵を見て来なければなりません。なぜ、そんなに見て来なければならぬような気もちになつてしまつたのか、自分でもよく分かりません。僕のうちの何物かがそれを僕に強く命ずるのです。それにどういふものか、こんどそれを見損つたら、一生見られないでしまふような焦しょうそう躁そうのようなものさえ感ぜられるのです。——

で、僕は朝おきぬけにホテルを立てるようにつきり荷物をまと

め、それからやつと落ちついた気もちになって、君にこの手紙を書き出しているのです。こんどこちらにちよつと来ているうちにいろいろ考えたこと——というより、三年まえに君と同道してこの古い国をさまよい歩いたときから僕のうちに萌きざしだした幾つかの考えのうちでも、まあどうやらこうやら恰好のつきだしているものを、ともかくも一応君にだけでも報告しておきたいと思うのです。

その三年前のこと、僕はいままでの仕事にも一段落ついたよう

なので、これから新らしい仕事をはじめめるため、一種の気分転換に、ひとりで大和路をぶらぶらしながら、そのあたりのなごやかな山や森や村などを何んということなしに見てまわって来るつもりでした。それが急に君と同伴することになり、いきおい古美術に熱心な君にひきずられて、僕までも一しように懸命になって古い寺や仏像などを見だし、そして僕の旅りよのう囊はおもいがけなくも豊かにされたのでした。きょう僕がいろいろな考えのまにまに歩いてきた飛鳥の村々にしたって、この前君と同道していなかったら、きょうのようには好い収穫を得られなかったのではないかと思いません。もし僕ひとりきりだったら、僕はただぼんやりと飛鳥川だの、そのあたりの山や丘や森や、そのうえに拡がった気もちのい

い青空だのを眺めながら、愉たのしい放浪児のように歩きまわっていただけだったでしょう。——が、君に引っぱってゆかれる儘まま、僕はそんなものをついぞ見ようとも思わなかった古墳だの、廃寺のあとに残っている礎石だのを、初夏の日ざしを一ぱいに浴びながら見てまわったりしました。そのときはあんまり引っぱりまわされたので少し不平な位でした。しかし、どうもいまになって考えて見ると、そのとき君のあとにくつついて何気なく見たりしていたもののうちには、その後何かと思ひ出されて、いろいろ僕に役立ったものも少くはないようです。あのあやめいけこふん菖蒲池古墳のごときは、君のおかげで僕の知った古墳ですが、あれなどはもつとも忘れがたいもののひとつでありましょう。

そうです、そのときはまず畝傍山の松林の中を歩きまわり、久米寺めでらに出、それから軽かるや五条野などの古びた村を過ぎ、小さな池（それが菖蒲池か）のあつた丘のうへの林の中を無理に抜けて、その南側の中腹にある古墳のほうへ出たのでしたね。——古代の遺物である、筋のいい古墳というものを見たのは僕にはそれからはじめてでした。丘の中腹に大きな石で囲った深い横穴があり、無む慚ざんにもこわされた入口（いまは金網がはつてある……）からのぞいてみると、その奥の方に石棺らしいものが二つ並んで見えていました。その石棺もひどく荒らされていて、奥の方のにはまだ石の蓋ふたがどうやら原形を留めたまま残っています、手前にある方は蓋など見るかげもなく毀こわされていきました。

この古墳のように、夫婦をともに葬ったのか、一つの石廊せつかくのなかに二つの石棺を並べてあるのは比較的に珍らしいこと、すっかり荒らされている現在の状態でも分かるように、これらの石棺はかなり精妙に古代の家屋を模してつくられているが、それはずつと後期になって現われた様式であること、それからこの石棺の内部は乾漆かんしつになつていたこと、そして一めんめんに朱で塗られてあつたと見え、いまでもまだどこどこに朱の色が鮮やかに残っているそうであること、——そういう細かいことまでよく調べて来たものだ。と君の説明を聞いて僕は感心しながらも、さりげなさそうげんしつな顔つきをしてその中をのぞいていました。その玄室げんしつの奥ぶかくから漂つてくる一種の湿め湿めとした気とともに、原始人

らしい死の観念がそのあたりからいまだに消え失せずにいるよう
で、僕はだんだん異様な身ぶるいさえ感じ出していました。——
やっとその古墳のそばを離れて、その草ふかい丘をずんずん下り
てゆくと、すぐもう麦畑の向うに、橘寺のほうに往くらしい白い
道がまぶしいほど日に赫かがやきながら見え出しました。僕たちはそれ
からしばらく黙りあつて、その道を橘寺のほうへ歩いてゆきまし
た。……

そうやって君と一しよにはじめて見たその菖蒲池古墳、——そ

のときはなんだか荒^{すさ}んだ、古墳らしい印象を受けただけのよう
に思っていました。だんだん月日が立つて何かの折にそれを思い
出したりしているうちに、そのいかにもさりげなさそうに一ぺん
見たきりの古墳が、どういうものか、僕の心のうちにいつも一つ
の場所を占めているようになって来ました。——いわば、それは
僕にとっては古代人の死に対する観念をひとつの形象にして表わ
してくれているようなところがあるのでありましょう。いつごろ
からそういう古代人の死の考えかたなどに僕が心を潜めるよう
になったかと云いますと、それは万葉集などをひらいて見るごと
にそこにいくつとなく見出される挽歌^{ばんか}の云うに云われない美しさに
胸をしめつけられることの多いがためでした。このごろ漸^{ようや}くそう

いう挽歌の美しさがどういふところから来ているかが分かりかけて来たような気がします。

先ず、古代人の死に対する考えかたを知るために、あの菖蒲池古墳についてかんがえて見ます。あの古墳に見られるごとき古代の家屋をいかにも真似たような石棺様式、——それはそのなかに安置せらるべき死者が、死後もなおずっとそこで生前とほとんど同様の生活をいとなむものと考えた原始的な他界信仰のあらわれ、或いはその信仰の継続でありましょう。しかし、僕たちが見たその古墳のように、その切妻形の屋根といい、浅く彫上げてある柱といい、いかにもその家屋の真似が精妙になってきだすのと前後して、突然、そういう立派な古墳というものがこの世から姿を消

してしまふことになつたのです。これはなかなか面白い現象のようです。勿論、それには他からの原因もいろいろあつたでしょう。だが、そういう現象を内面的に考えてみても考えられないことはない。つまり、そういう精妙な古墳をつくるほど頭脳の進んで来た古代人は、それと同時にまた、もはや前代の人々のもつていたような素朴な他界信仰からも完全にぬけ出してきたのです。——

一方、火葬や風葬などというものが流行^{はや}つてきて、彼等のあいだには死というものに対する考えかたがぐつと變つて来ました。それがどういふ段階をなして變つていったかということが、万葉集などを見ているとよく分かるような気もちがします。……

たとえば、卷二にある人麻呂の挽歌。——自分のひそかに通つ

ていた軽かるの村の愛人が急に死んだ後、或る日いたたまれないよう
 に、その軽の村に来てひとりで懊惱おうのうする、そのおりの挽歌であ
 りますが、その長歌が「……軽かるの市にわが立ち聞けば、たまだす
 き畝傍うねびの山に鳴く鳥の声も聞えず。たまぼこの道行く人も、ひと
 りだに似るが行かねば、すべをなみ、妹いもが名呼びて袖ぞ振りつる」
 と終わると、それがこういう二首の反歌でおさめられています。

秋山あきやまの黄葉もみぢを茂み迷まどはせる妹いもを求めむ山路やまぢ知らずも

もみぢ葉ばの散りゆくなべにたまづさの使つかひを見れば逢あひし日思おも

ほゆ

丁度、晩秋であつたのでありましょう。彼がそうやって懊惱しながら、軽の村をさまよつていきますと、おりから黄葉がしきりと散つております。ふと見上げてみると、山という山がすっかり美しく黄葉している。それらの山のなかに彼の愛人も葬られているのにちがいないが、それはどこいらであらうか。そんな山の奥ぶかくに、彼女がまだ生前とすこしも変らない姿で、なんだか道に迷つたような様子をしてさまよいつづけているような気もしてならない。だが、それが山のどこいらであるのか全然わからないのだ。……

そんなことを考えつづけていると、突然、誰か落葉を踏みながら自分のほうに足早に近づいてくるものがある。見ると、文を挿ふみはさ

んだ梓あずさの木を手にした文ふづか使いである。ふいと愛人の文ふみを自分に届
けに来たような気がして、おもわず胸をおどらせながら立ち止ま
っている、落葉の音だけをあとに残してその文使いは自分の傍
を過ぎていってしまふ。突然、亡き愛人と逢つた日の事などが苦
しいほど胸をしめつけてくる。

そういう情景がいかにもまざまざと目の前に蘇よみがえつて来るよう
であります。それだけで好い。その軽の村がどういふところである
かも、その歌がおのずから彷彿ほうふつせしめている。その藤原京ふじわらきやう
のころには、京にちかい、この軽のあたりには寺もあり、森もあ
り、池もあり、市いちなどもあつたようであります。その死んだ愛人
などもよくその市に出て、人なかを歩いたりしたこともあつたら

しい。そしてその路からは畝傍山がまぢかに見える、そのあたりには鳥などもむらがり飛んでいたのでありましょう、——今もまだその軽の村らしいものが残っております。その名を留めている現在の村は、藪やぶの多い、見るかげもなく小さな古びた部落になり果てていますが、それだけに一種のいい味があつて、そこへいま往つてみても決して裏切られるようなことはありません。

低い山がいくつも村の背後にあります。そういう低い山が急に村の近くで途切れてから、それがもう一ぺんあちこちで小丘になったり、森になったり、藪になったりしているような工合の村です。そういう村の地形を考えに入れながら、もう一ぺんさっきの歌を味わってみると、一層そのニュアンスが分かつて来るような

気がします。

すこし横道にそれてしまいましたので、本題に立ちかえりましよう。僕はその人麻呂の挽歌——就なかんずく中なかその第一の反歌のなかに見られる、死に対する観念をかんがえて見ようとしていたのでした。

秋あきやま山の黄葉もみぢあはれとうらぶれて入りにいも妹は待てど来まさず

これは卷七の雑くさくさの挽歌のなかに出てくる作者不詳のものであります。非常に人麻呂の歌と似ていて、その影響をたぶんを受けて

出来たものとおもわれますが、とにかくそれで見ても、こういうような愛する者の死に対する思想が、たんへん当時の人々に気に入られたということが分かるのであります。——その当時はもう原始的な他界信仰から脱して人々は漸くわれわれと殆ど同じような生と死との観念をもちはじめていたのにちがいありません。だが、自分の愛しているものでも死んだような場合には、死後もなお彼女が在りし日の姿のまま、その葬られた山の奥などをしよんぼりとさすらっているような切ない感じで、その死者のことが思い出されがちでありましょう。そういう考え方は嘗^かつての他界信仰の名残りのようなものをおおく止めておりますが、半ばそれを否定しながらも、半ばそれを好んで受け入れようとしている、——

—すくなくとも心のうえではすっかりそれを受け入れてしまっているのではありません。そうしてまた一方では、そういう愛人の死後の姿をできるだけ美化しようとする心のはたらきがある。……そういうさまざまな心のはたらきが、ほとんど無意識的に行われて、なんの造作もなくすうつと素直に歌になったところに、万葉集のなかのすべての挽歌ばんかのいい味わいがあるのだらうと思われます。

かる 軽の村の愛人の死をいたんだ歌とならんで、もう一首、人麻呂がもうひとりの愛人（こちらの愛人とは同棲どうせいをし、子まであつた）の死を悲しんだ歌があり、それにも死者に対する同様の考えかたが見られます。「……大鳥おとりの羽はがひの山に、わが恋ふる妹いもはいますと人のいへば、岩根いわねさくみてなづみ来し、よけくもぞな

き。現身うつそみとおもひし妹いもが、玉かぎるほのかにだにも見えぬ、思へば。」——人は死んでしばらくの間は山の奥などに生きているときとすこしも変らない姿をして暮らしているものだ、老人などのいうことを聞いて、亡くなった妻恋いしさのあまりに、もしやとおもって、岩を踏み分けながら、骨を折って山のなかを捜してみたが、それも空しかった。ひよつとしたら在りし日さながらの妻の姿をちらりとでも見られはすまいかと思っていたが、ほんの影さえも見るができなかった。——これはその長歌の後半をなしている部分ですが、ここにも人麻呂の死に対する同様の観念があらわれております。——すこしそれが露骨に出すぎている位で、いかにも情趣のふかい前の歌ほど僕は感動をおぼえません。

でも、「大鳥おおとりの羽はがひの山」などというその山の云いあらわしかたには一種の同情をもちます。翼を交叉こうささせている一羽の大きな鳥のような姿をした山、——何処にあるのだから分からないけれども、なんだかそんな姿をした山が何処かにありそうな気がする、そんな心象を生じさせるだけでもこの山の名ひとつがどんなに歌全体に微妙に利いているか分かりません。いろいろな学者が「大お鳥とりの」を枕詞まくらことばとして切り離し、「羽買山はがひやま」だけの名をもった山をいろいろな文献の上から春日山の附近に求めながら、いまだにはつきり分からないでいるようであります。勿論、学としてはそういう努力が大切でありましょうが、これを歌として味わう上からは、そういう羽買山ではなしに、何処かにありそうな、

大きな鳥の翼のような形をした山をただぼんやりと浮かべて見て
いるだけの方がいいような気がするのです。……

僕は数年まえ信濃の山のなかでさまざま人の死を悲しみなが
ら、リルケの「Requiem 《レクヰエム》」をはじめて手にして、

ああ詩というものはこういうものだったのかとしみじみと覚さとつた
ことがありました。——そのときからまた二三年立ち、或る日万

葉集に読みふけているうちに一いちれん聯の挽歌に出逢い、ああ此処

にもこういうものがあつたのかとおもいながら、なんだかじつと
していられないような気もちがし出しました。それから僕は徐しずか
に古代の文化に心をひそめるようになりました。それまでは信濃
の国だけありさえすればいいような気のしていた僕は、いつしか

まだすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘われるようになって来ました。……

そういうようにして漸やつとはじめて大和路に来た三年前のこと、君と一しよに見た、菖蒲池古墳のことから、つい考えのまにまに思わぬことを長ながと書いてしまいました。別に最初からどういふことを書こうかと考えて書き出したわけのものでもないのです、これはこれとしてお読み下さい。

——でも、最初まあそんなものでも書こうとしかけていた僕の

きよようの行程を続けてみますと、そうやって軽のあたりをさまよった後、つるぎいけ 劍の池のほうに出て、それからわらづか 藁塚のあちこちにうずたか 堆積まれている苅田のなかを、かぐやま 香具山やみみなしやま 耳成山をたえず目にしながら歩いていっているうちに、いつか飛鳥川のまえに出てしまいました。ここいらへんはまだいかにも田舎じみた小川です。が、すこしそれに沿って歩いていきますと、すぐもう川の向うにいかずち 雷の村が見えてきました。土橋があつて、ちよつといい川原になっています。僕はそこまで下りて、小さな石に腰かけながら浅いながれに目をそそいでいました。なんだかせきれい 鵲せきれい 鳩でもぴよんぴよん跳ねていたら似合うだろうとおもうような、なんでもない景色です。それから僕は飛鳥の村のほうへ行く道をとらずに、あまがし 甘櫃おか の丘の縁を縫い

ながら、川ぞいに歩いてゆきました。ここいらからはしばらく飛鳥川もたいへん好い。このまえ五月に君と一しよに歩いたときからよほど僕の気に入ったものと見えます。あのときにはあそこの丘の端に桐の花が咲いていた、このへんの道ばたには一もと野のいば茨らの花も咲いていたと、そんな小さな思い出までも浮かんでくる位なのです。……

こんなことをまた書き出していたらきりがありません。もうおもい切ってここいらで筆をおきます。——その日の夕がた、最後のバスに乗りおくれた僕はしようがなく橘寺をうしろにして一人でてくてく歩き出しました。途中で夕焼けになり、南のほうに並んでいる真弓まゆみの丘などが非常に綺麗に見えました。それから僕は

せつかくその前まで来ているのだからと思つて、菖蒲池古墳のあ
る丘を捜してそこまで上がつていつて見ました。が、その古墳の
前まで辿りついたときにはもう日がとつぷりと昏れて、石廓の
なかはほとんど何も見えない位でした。それでも僕はバスに乗り
おくれたばかりにもう一度それが見られて反つて好いことをした
と思ひながら、もと来た道を引つかえして再び駅のほうへ薄暮の
なかを歩いてゆきました。それからまた五条野のあたりで道に迷
つて、やつと駅に著いたときは月の光を背に浴びていたことは前
にも書きました。

もう大ぶ夜もふけたようです。あすからの旅のことを思ひなが
ら、ちよつと部屋の窓をあけてみたら、凄いような月の光のなか

に、荒池がほとんど水を涸らしてところどころ池の底のようなものさえ無気味に見せています。僕はなんとということもなしに複製で見たエル・グレコの絵を浮かべました。——こんやはどうも寝たくはないような晩だけれども、あすの朝は早いのだし、それに四時間ばかり汽車にも乗らなければならぬのだから、なんとかうまくあやして自分を寝つかせましょう。

一九四一年十二月四日、奈良ホテルにて

はだれ
斑雪

「冬になって、雪がふつたら、すぐ知らせて下さい。そのときはきつと、一人でもやって来ますから。……」

その山の村にとうとう居残って冬を越すことになったK君夫妻に僕はその秋のなかばその村を立ち去るとき、そう云い残していった。

「……けさほどから急に雪がふりだしていますの。この分では大ぶ積りそうですので、主人が早くお知らせした方がいいと申しますから、これからこの手紙をもって雪のなかを郵便局まで一走りいたします」

——まりこ万里子さんからそう云ってよこしたのは、もう十二月も末

近かった。

僕はまえから雪の信濃路を見たがつていた学生のM君を誘ったり、一しよに往く筈だった妻の都合が悪かったりして、すこし出かけるのに手間どり、妻だけ二三日あとから来させることにして、漸つとその小さな冬の旅に出たのは、それから四五日たつてからのことだった。……

ゆうがた着いたその山の村には、数日まえの雪はもう殆ど消え、林の中などにところどころわずかに雪らしいものが残っているきりだった。そんな一つの林の奥に、K君たちが冬ごもりをしている山小屋がある。

「まあ、よくいらつしやいました」その小屋の中から飛びだして

きて僕たちを出むかえた万里子さんは、一とおり挨拶がすむと、さも困ったように大きい目をしてまじまじと僕の方を見ながら言った。「——でも、もうすっかり雪がなくなってしまうていて。なんだか……」

「いやあ、雪なんぞはどうでもいいですよ。」

僕はあわてて手をふりながら、それを遮った。

「こないだの雪は午前中ふったきりでしたの。大ぶ積ったことは積りましたけれど、午後から日があたって見る見るとけていってしまうので、あんな手紙なんか出してしまって、気が気でありませんでしたわ。——でも、まだあそこいらには少しばかり残っていますの。」

もう薄暗くなり出している林の奥のほうにまだいくらか残雪が何かの文様もようのようにみえるのを、万里子さんはすこし気まり悪そうにして示した。

僕はもうそんなものはどうでもよかったが、すっかり葉が落ちて林の中がどこまでも透いてみえたりするのを珍らしそうに見ているM君におつきあいして、その儘まましばらく三人でそこに立って見ている。そのうち小屋のかけからボブが飛び出してきた。

「ボブ、駄目よ。……」万里子さんはその人なつこい犬が泥足でもって僕のほうに飛びかかろうとするのを、すばやく捕まえた。

「よう。」K君が小屋の中から首だけ出して僕たちに声をかけた。「何をしているんだい。寒いだろう。」

「こないだの雪をお見せしていますの。」万里子さんはボブがもがくのを漸やつとおさえつけながら言った。

「雪なんぞはもうありあしないだろう。」寒がりのK君はうちの中でも頸くびまき巻まきをしたままで、小屋から出て来ようともせず僕たちを促した。「早くはいりたまえ。」

「さつきここの林のいりぐちで、クルツとといったかな、あの、変な女を見かけたが、なんだか夏とは見ちがえるような、凄い毛皮の外套を着て、真紅なベレかなんぞかぶって、氣どった風に歩いていたが、こんな冬の村に一人きりで何をしているんだらう？」僕だんろは暖炉で体が温まると、突然その不思議な女のことを思いなが

ら言つた。

「では、きょうまた見にきたのでしょうか。これで三度目ですわ、」万里子さんは急に目を大きくして、頸巻をしたまま煖炉の火を掻きまわしていたK君のほうを見た。

「なんだかよく来るね。」K君はやつと手を休めながらその話に加わつた。「このすこし向うに、十一月ごろまでいた独逸人ドイツじんの

一家がいてね、それがクリスマス頃になつたらまた来るからと云つて、一時引き上げていったのさ。——その人達がまだ来ていなかどうかと、そうやつてもう二週間ぐらいも前から、毎日のようにその女が様子を見にくるのだよ。二三度、僕たちのところにも立ち寄つて、何か心配そうに様子をきくので、こつちでもその

度に相手になってやっていたが、問い合わせの手紙でも出したらどうかと云うと、ただ首をふっているきりなのだ。もうその家では来ないことが分かっているのだ。それだのにこの頃は一日のうち二度も三度もやって来るんだ。いつもあの毛皮の外套をきて、紅いベレをかぶって。——そうしてその度に、僕たちの家の中をじいっと見てゆくんだ。それをまた万里子が薄気味わるがってね。……」

「結局、一人でさびしくってしようがないんだな。こっちにいる他の外人とは全然つきあわないのかい。」

「どうもその女だけ除^のけものにされているらしい。村の人にきくとあの女はしようがありませんと云って、てんで相手にならない

んだ。」

「そんななのかい。——僕はどういう素性の女かよく知らないが、夏なんぞその女が奇妙ななりをして、買物袋をぶらさげながらなんだかしよぼしよぼして歩いているのを見かけては、何者だろうとおもっていたんだがね。あれで、この夏聞いたことだが、恋人がいるんだそうだ。毎夏やってくるハンガリーの音楽家でね、その男と町などで逢うと、人中だろうと何だろうと構わずに立ち止まって、黙ってその音楽家の顔を穴のあくほどじっと見つめているのだそうだよ。それがもうかれこれ十年來の意中の人なのだろうだ。」

「あの女にもそんな話がね。」K君はうなずいていた。

「どうもこんなところに来ている外人には突拍子とつびようしもない奴がいるものだな。——夏あんなに見すばらしいなりをしていた女が、冬になって誰れもいなくなると、急にすばらしい毛皮の外套なぞを着込んで林の中をあるいていようなんで、想像もできないことだよ。だが、ああして一人つきりでもって、よく暮らしてられるものだなあ」

「本当によく暮らしているね。……」K君も考え深そうに答えた。「だが、人のことよりか、君も寒がりのくせに、こんなところでよく我慢しているね。——どうして暮らしているだろうと、ときどき噂をしていたよ。」

「暮らそうとおもえば、どんなことをしても暮らせることが分か

ったよ。それに寒さだつて、こういうものだと思つてしまえば、いくらでも我慢していられるね」

「でも、万里子さん。」と僕は言葉を挿^{はさ}んだ。「あなたの方^しの爲^{ごと}事は大へんでしよう？」

「そんなでもありませんわ、いまのところ何んにも困りませんの。」「万里子さんはそんな事はいかにも何んでもなさそうな答えかたをした。

「そりあ困らないわけさ、一週間も同じものばかり食べさせられていても、僕はなんにも言わないんだもの。」「K君はそうは言つても、すこしも不平そうではなかつた。むしろ、そういう山のなかの簡素な暮らしを好んでいるようにさえ見えた。

夕食は、しかし山のなかでは思いがけない御馳走だった。ひさしぶりに四人で鳥鍋をかこみながら身も心も温かになつて、世はさまざまな話をするのは愉たのしかった。

僕はこの秋から冬にかけてひとり旅して歩いた大和路のことを話した。それからその旅のおわりに、エル・グレコの絵を見てきたことなども話した。——その倉敷という小さな町まで五時間もかかつて往つて、やっとその美術館にたどりつき、画廊にはいるなり、すぐエル・グレコの絵に近づいて見ると、それは思ったより小さなものだったが、いかにも凄い絵で、一ぺんではねつけられ、しかたなく他のゴッホやロオトレックなどを一とおり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんど

はやつと少し平静な気分でその絵に向えたことなど話しながら、エル・グレコなんぞの絵の自分たちにとって、なまやさしいものでないことをしみじみと告白した。

「それもごく小さな「受胎告知図」なんだがね。そこでは、この抒情的な画題に対していただいている僕たちの観念がもの見事に粉碎せられてしまっているのだ。天使は天使で、闇のなかから突然ぎらぎらと光を発する異常なものとして描かれているし、その天使のほうを驚いて見あげている処女の顔も何かただならぬように見える。すべてがいかにも悲劇的な感じなのだ。……こんどはこの一枚だけでもよく見てゆこうとおもって、ずいぶん一所懸命になって見てきたつもりだが、どうしてもまだその絵が分かった

ようで分からない。そう、分らないというより、なんだかこんな絵がこんなところに来ているのが不思議な気がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にいないような……それほど何か異様なのだ……」

「そのグレコの絵は僕も見たいね。」K君は何かじつと煖炉だんろの上の空間を見入っているらしかった。

「こうやって火を焚たいていると夜でもちつとも淋しくないのでしよう。」僕はふいと万里子さんのほうを向いて言葉をかけた。いつのまに台所からはいつて来たのか、万里子さんの足もとにはボブが温かそうにうずくまりながら、僕たちの団だん欒らんのなかに加わっていた。

「——僕ははじめてここで冬を越すことになったとき、夕方になるといつも淋しくって淋しくってどうしようかとおもうのだけれど、すっかり夜になって火をどんどん焚きはじめると、もうちつとも淋しくなくなったものでしたよ。」

「本当に。」万里子さんは大きい目でしげしげと僕のほうを見かえしながら、深くうなずいた。

それからまた煖炉を前にして、ひとしきりさまざまな話はずんだ。……

その夜十時過ぎ、僕たちは宿に引き上げることにした。K君たちもそこまでちよつと送ろうといって頸くびまき巻まきをしたり、外がいとう套とうをきたりしだしていた。もういいからとことわっても、一しよに小

屋を出た。ボブもあとからくつついてきた。夜の空気は稀薄で、痛いように冷え切っていた。僕たちはあすは何処かもつと山の方
—— すがだら菅 平か、のべやま野辺山あたりまで出かけ、妻がこちらに来る頃
にまた戻つてくることを約束して林のはずれで別れた。

僕たちはそれから沈黙がちに、枯木の下を抜け抜け、僕たちの靴に踏まれて凍った土の割れる音を耳にしながら、歩いていった。するともう一つ、ときどき何処かから、それとはちがった、硬い、金属的な幽かすかな音が聞えて来た。

「あれは何んの音でしょう？」 M君がいぶかしそうに訊きいた。

「ああ、あれかい。あれは、君、枯枝と枯枝とが風でぶつかる音だよ。——ほら、ああやってちよつとぶつかるだけでも、ずいぶ

ん鋭い音を立てるだろう。空気がぱりぱりになっているのだね。

……」

そう言いながら、一しよに頭上の梢をみあげていると、絶えずかすかに揺れている枯枝の網を透いて、一めんの星空だった。そうしてその星のひとつひとつが東京なんぞの空で見えるよりかすつと大きく見えた。

突然、右手の空家の庭の一隅で、がさがさと溜たまった落葉がひつかきまわされるような音がきこえた。何か白いものがそこいらをひとりで駆けずりまわっていた。

「ボブ！」僕はそのほうへ声をかけて見た。

すると、まるでその木魂こだまのように、向うの林の奥から「ボブ！」

と呼ぶ声がかすかにした。

「いまのは万里子さんらしいね。静かだなあ。なんだか、こう、ひさしぶりで昔の冬に出逢ったような気もちがしてならないよ。

……」

「またこちらで冬をお越しになりませんか？」 M君はさもそれが何んでもないことのように言った。

「そういうこともときどきは考えている。……」僕はただそう言
つたぎりだった。

僕たちはまた凍った土を踏み割りながら、しず徐かに歩き出した。

翌日。僕たちは朝はやく小諸^{こもろ}まで行き、そこから八つが岳の裾野を斜に横切るガソリン・カアに乗り込んだ。もう冬休みになつていても、この山麓^{さんろくちほう}地方はあまりスポルティフではないので、乗客は僕たちのほかはみんな土地の人たちらしかった。

南佐^{みなみさく}久の村々の間をはじめの一時間ばかりは何事もなく千曲川に沿つてゆくだけだが、そのうち川辺の風景が少しずつ變つてきて、白^{はこやなぎ}楊^{かば}や樺の木など多くなり、石を置いた板屋根の民家などが目立ちだした。そうしてそれらの枯木だの、家だのの向うに、すっかり晴れ切つた冬空のなかに、真白な八つが岳の姿がくつきりと見えるようになって来た。

そうやってまだ人家のおおい平原を横切りながら、ぐんぐんと雪のある山に近づいてゆく一種の云い知れない快感を満喫しながら、僕は時々、物陰などにまだ残っている雪の工合などへも目を配っていた。

「この分では、野辺山までいっても雪は大したことはなさそうだぜ。」

僕はそんなことを口ごもったりした。

「そうですかしら。」M君はもう見当がつかないような様子をして、ただ窓の向うに白く赫かがやいている八つが岳のほうを見つづけていた。

そのうち、だんだん谷間のようなところにはいり出す。しばらく

くはもう山々ともお別れだ。そうして急に谷川らしくなりだした千曲川の流れのまん中に、いくつとなく大きな石がころがっているのばかり目に立ってくる。そんな谷の奥の、海の口うんぐちという最後の村を過ぎてからも、ガソリン・カアはなおも千曲川にどこまでも沿ってゆくように走りつづけていたが、急に大きなカアブを描いて曲がりながら、ならばやし 櫛林かなんぞのなかを抜けると、突然ぱあつと明かるい、広々とした高原に出た。そうしてまだ雪もかなり沢山残っているその草原の向うの一带の森のうえに、真白な八つが岳——そのうちでも立派な赤岳と横岳とが並んで聳そびえ立っていた。

「高原というのは、こうやってそこへ出た時の最初の瞬間がなん

とも云えず印象的でいいな。」僕はそういう目付をしてM君の方を見た。

やがて、野辺山駅に着いた。白い、小さな、瀟洒とした建物で——いや、もうそんなことはどうでもいいことにしよう。——それよりか、僕はその小さな駅に下りかけて、横書きの「野辺山」という三文字が目飛びこんできた途端に、なにかおもわずはつとした。いままではさほどにも思っていなかった「野辺山」という土地の名がいかに美しい。まあ何んという素樸な呼そぼくびかたで、いい味があるのだろう。そうして此処まで来て、その三文字をなにげなく口にするとき、はじめてそのいい味の分かるような、それほどこの土地の一部になりきってしまったている純粋な名なんだ

などおもった。……

その高原の駅に下りたのは僕たちのほかには、二人づれの猟師が一組あるきり。——その猟師たちは駅員と一しよになって檻おりに入れられてきた猟犬をとり出しにかかっていた。

そこで僕たちは二人きりで駅のそとに出たが、其処はいちめんの泥濘だった。駅の附近には、一棟の舎宅らしいもののほか、二軒ばかり休み茶屋みたいなものがあつたが、どちらも戸を閉ざしていた、——そんなところで一休みして、簡単に腹でもこしらえながら、それからどこをどう歩くか考えてみるつもりだった。そこへいつてみれば、大体どうすればいいかがひとりでは分かつてくるだろう位に、僕はいつもの流儀で高を括くくっていた。

だが、すぐ目のさきに赤岳だの横岳だのがけぎやかに見えていながら、この泥濘の道ではどうしようもない。せつかくの野辺山が原もいい気もちになつて歩きまわるわけにゆきそうもない。それに、もう午ひる近い。なんとか腹をこしらえないことには。……

「あそこに何かしごと為事をしている人たちが見えるな。あの人たちに訊いたら、すこしはこのへんの様子が分かるかもしれない。」

僕はM君にそう言い、ひどい泥濘の中にはいり込まないように、道のへりのほうを歩きながら、旧街道らしいものの傍らで、二人の法被はつびすがたの男がせつせと為事をしている方へ近づいていった。が、だんだんそつちへ近づいていって見ると、その男たちが何か荒ら荒らしい手つきで皮を剥むいているのは兎であるのが分かつ

てきた。そうしてまだ生ま生ましいような皮がいくつももう板に
拵げて張りつけられてあるのが見え、皮を剥はがされた肉の塊りが
道ばたまでころがり出していた。

「こいつはかなわないや。一番の苦が手だ。もう一ぺん駄までひ
つかえして、訊きいてみよう。」

僕はさっさとそつちへ背を向けて、もう泥濘の中だろうとなん
だろうと構わずに、その街道を突っ切りだした。そのときひよい
と目を上げると、ちょうど鼻のさきに小さな道標が立っている。

それでみると右が板橋、左が三軒屋。両方とも約二軒位キロ。——そ
うそう、板橋という部落はなんだか聞いたことがある。たしか、
そこにはわびしい旅籠屋はたごやなんぞもあつたはずだ。二軒ぐらいなら、

思い切つて往つてみようかと、M君と相談していると、——その板橋のほうへ通じている、片方は林で、もう一方は草原になった、真直な街道を、何処からどう抜け出したのか、さつきちらりと駅で見かけた猟師が二人、大きな猟犬を先立てながら、さつきと歩いてゆくのが見える。

「往こう。」と僕は言った。

「ええ。」M君もそれにすぐ応じた。

僕たちはその猟師たちのあとを追うようにしてその街道を歩き出した。どこもかもひどい泥濘だが、道のへりなどにはまだすこし雪が残っている。そんな雪のうえを択んで歩き歩き、ときどき片側の枯木林を透かしながら赤岳だの横岳だのをちかちかと目に

入れたり、もう一方の、まだかなり雪が残っているような、果てしなく広い草原のはるかかなたを、甲武信こぶしの国境の薄白山々が劃くぎっているのを眺めたりしていると、なかなか好いことは好い。日光もほどよく温かで、こうして歩いているとすこし汗ばんでくる位。——だが、ものの十分とたたないうちに、僕たちの前方を歩いていた獵師たちは、急に林の中へでもはいつてしまったのか、もう影も形も見えない。そのかわりに、いつのまにか、僕たちの背後には重そうな鞆かばんを背負った郵便配達夫がひとり姿をあらわし、黙々として泥濘のなかを歩きつづけながら、傍目もふらずに僕たちを追い越そうとしているのだった。——僕たちも何かそれにつりこまれたように、ふたりとも急に黙り合って、ぼんやりと立ち

止まったまま、その郵便配達夫の通り過ぎるのを見送っていた。

僕たちはとうとう二人きりになってしまうと、別にいそぐ旅でもないので、雪のまだかなりありそうな草原のほうへちよいとはいつていつて見た。雪は、しかし、其処にもそうたんと残つてはいない。ただ遠くから見た目に何んとなくそう見えるだけのものらしい。が、そんな少しばかり雪の残った草原のまんなかに立つて見ると、あちこちに一本ずつ離れ離れに立っている樺かばの木なんぞが、その変に枝をねじらせている工合までも、何かなつかしく思われてくる。

「こういう高原の木は、どこか孤独の相のようなものを帯びているね。」僕はふとM君にそう言ってみたが、それだけではまだな

んだか言い足りないような気がした。

それから僕たちはその儘、その草原の雪のうえを歩いてみたが、なかなか道がはかどらない。そこで、またさっきの街道のほうへ出ることにした。

みると、こんどはその街道をやはり板橋のほうへ向かって、一匹の牝山羊をつれた女が、こう、すこし首をうなだれるようにして歩いてゆく。まだ若い女らしい。

冬の真昼、ときどきまぶしく光っている雪原、風のために枝のねじれた樹木、それらのすべてを取り囲んでいる雪の山々、——
そういう自然の中からひとりでに生れてきたようなその羊飼いの女。
……

「まるでセガンティニの女みたいだね。」僕はおもわず小さく叫んだ。「あの首のうなだれ方までそっくりだな。」

「セガンティニは僕はあの倉敷の美術館にあるのしか知らないな。」

M君は僕の言葉をそのまま受け入れるにはすこし自信がなさそうだ。

「そりあ知らないといえ、僕だつてなんにも知らないようなものだがね、ただまあひよいとそんな聯れんそう想がうかんだんだ。」僕の方でもそんな云いわけをした。「そういえば、あそこにもアルプスの絵かなんかあったね。あれはどんな絵だったかな？」

「たしか真昼の牧場の絵で、アルプスが遠く見え、前のほうに羊

飼いの女の立っているような構図だったとおもいますが。……」
「ああ、それで思い出した。なんだかこう妙にねじくれた白樺の木にその女がもたれているんだろう。……」僕はその美術館ではエル・グレコの絵しか見て来なかったような気がしていたが、セガンティニのような特異な絵はやはり注意して見ていたものに見える。さつき草原に立った木をなつかしそうに見ながら、何かいまにも思い出せそうでまだ思い出せずにいるものが、その殆ど忘れかけていたセガンティニの絵に描かれた白樺の木とも何か関係のありそうなことをふいと感じた。だが、それはまだ僕のうちでもはつきりとしていない。……

僕たちはその牝山羊をつれた若い女に追いつこうとして、いそ

いで泥濘の街道に出て、再び道ばたの雪を拾いながら歩きはじめた。が、そんなことをして漸ようやつと歩いている僕たちは、泥濘のなかをも平気で歩いてゆくその牝山羊をつれた女にもずんずん引き離されてしまった。そうしていつのまにか、また僕たち二人きりにされてしまった。

そんな調子でいくら歩いていっても、野辺山が原は尽きそうもない。もうかれこれ一時間ぐらひは歩いているだろう。腹もへつてきているし、もうおしやべりをする元気もなく、二人とも泥だらけになった靴をただ重そうに運んでいるきりになった。——そうして僕はもう口には出さずに、昔小さな本で読んだことのあるセガンティニの美しい生涯などを考えつづけていた。セガンティ

二には、アルプスの高原の自然のなかに——いわば人間の住める自然のぎりぎりの限界のようなところに人間を置いて描いているような絵が多いが、その絵がどれもこれも妙に人なつこい。人間の世界から離れれば離れるほど、そしてそこに描かれてあるアルプスの風景がいよいよよきびしければきびしいほどセガンティニの絵のもっている人なつこさはいよいよ切実になってくる。——そこにセガンティニの絵の写真を見ただけでも、僕たちが何か心を動かされるものがありはすまいか。……そうだ、僕がさつき草原に立った木をしみじみと見ているうちに、ふいと何か思い出せそうで思い出せずにいたもの、そのために知らず知らず心を一ぱいにさせていたもの、それはそんな木の或る恰かっこう好ばかりではなし

に、こういう高原のなかに生を得ているすべての小さな生きものもつている深い味なのだ。それらのものは、ちよつと見ると、何か近づきがたいような孤独の相を帯びてみえるけれど、それらのものほど人なつこいものはないのだ。それほど切実に、存在の本質にあくがれているものはないのだ。……

そんなことを考えつづけながら、僕はもう自分の泥だらけになった靴の重たさもさほど苦にしなくなっていた。

「あそこの藪やぶのなかに馬が二三匹草を食べていますね。もう村が近づいてきたのではないでしょうか。」

M君は自分の大きな身体をすこし持ち扱かい出しているように見える。

「畠もあるじゃないか。」僕はおもわず声をはずませた。「もう村に着いたようなものだ。」

いつか僕たちの歩いている街道は草原から離れて、両側が雑木林だの畠だのに変わってきた。そうしてすこし坂道になり出した。そういう地形の変化は、もうさすがの曠野も果てようとしていることを思わせた。それに元気づき、だんだん急になるその坂道をあがってゆくと、その突きあたりに一軒の藁屋根わらやねの家が見え出し、そうしてその家の前の、ちょうど山かげになった道のほとりで、一人の瘦やせた老人がそこだけまだ一面に残っている雪をシャベルかなんかで掻かきよせていた。

そこまで坂をあがり切って、その手にしたシャベルに凭よりかか

つて一息ついている老人に軽く会釈しながら、ふとそのそばを通り過ぎようとした途端、すぐ目のまえに、川を挟んだ小さな部落が見え、そうしてその中ほどには、古びた木橋が一つ、いかにも人なつこそうに、そうして「板橋」という名前をもった村の目じるしのように懸かっていた。そうしていつか私達の眼界から遠ざかっていった八つが岳が、又、ちようどその橋の真上に、白じろとかが赫かがいていた。

辛夷の花

「春の奈良へ行って、馬酔木あしびの花ざかりを見ようとおもつて、途中、木曾路をまわつてきたら、おもいがけず吹雪に遭いました。

……」

僕は木曾の宿屋で貰った絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪のふっている木曾の谷々へたえず目をやつていた。

春のなかばだというのに、これはまたひどい荒れようだ。その寒いつたらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しよに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼつたいふゆがいと冬外套をきた男の

客がいるつきり。——でも、あげまつ上松を過ぎる頃から、急に雪のいきおいが衰えだし、どうかするとはあつと薄日のようなものが車内にもさしこんでくるようになった。どうせ、こんなばかばかしい寒さは此処いらだけと我慢していたが、みんな、その日ざしを慕うように、向うがわの座席に変わった。妻もとうとう読みさしの本だけもってそちら側に移っていった。僕だけ、まだときどき思い出したように雪が紛々と散っている木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎわに強情にがんばっていた。……

どうも、こんどの旅は最初から天候の具合が奇妙だ。悪いといつてしまえばそれまでだが、いいとおもえば本当に具合よくいつている。第一、きのう東京を立つてきたときからして、かなり強

い吹きぶりだった。だが、朝のうちにこれほど強く降ってしまった。ば、ゆうがた木曾に着くまでにはとおもっていると、午すひるこしまえから急に小ぶりになって、まだ雪のある甲斐かひの山々がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいえずすがしかつた。そうして信濃境しなのぎかいにさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすつかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせい、何かいきいきと蘇よみがえったような色さえ帯びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまつしるな山々がくつきりと見え出してきた。……

その晩、その木曾福島福島の宿に泊って、明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だった。

「とんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、気の毒そうにいうのだった。「このごろ、どうも癖になつてしまつて困ります。」

だが、雪はいっこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝いて、僕たちは宿を立つてきたのである。……

いま、僕たちの乗つた汽車の走っている、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがっているか、それとも、うつとうしいような雨空か、僕はときどきそれが気になりでもするように、窓に顔をくつつけるようにしながら、谷の上方面を見あげてみたが、山々にさえぎられた狭い空じゆう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞い狂っている無数の雪のほかに

はなんにも見えない。そんな雪の狂舞のなかを、さつきからときおり出しぬけにぱあつと薄日がさして来だしているのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの具合だが、ことによるとこの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうなあんばいにも見える。……

僕のすぐ隣の席にいるのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいうと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌あいづちを打っている。べつに僕たちに気がねをしてそんな話し方をしているような様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな恰かっこう好こうをしな

がら寝そべっていた冬外套の男が、ときどきおもい出したように起き上つては、床のうえでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだった。それがはじまると、その隣りの席で向うむきになつて自分の外套で脚をつつみながら本をよんでいた妻が僕のほうをふり向いては、ちよつと顔をしかめて見せた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はあいかわらず一人だけ、木曾川に沿つた窓ぎわを離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出てきたのを、なんだか残り惜しそうに見やつていた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅びとの去つたあとも、もうすこし木曾の山々にふつておれ。もうすこしの間でいい、旅びとが

おまえの雪のふっている姿をどこか平原の一角から振りかえって
しみじみと見入ることができるまで。――

そんな考えに自分がうつけたようになっておるときだった、ひ
よいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿さ
んだ。

「いま、向うの山に白い花がさいていたぞ。なんの花けえ？」

「あれは辛夷こぶしの花だぞ。」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかえって、身体をのり出すよ
うにしなながら、そちらがわの山の端にその辛夷の白い花らしいも
のを見つけようとした。いまその夫婦たちの見た、それとおなじ
ものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見

られはすまいかとおもったのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風にきよときよとそこいらを見まわし出したので、隣りの夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなつて、それをしおに、ちようど僕とは筋向いになつた座席であいかかわらず熱心に本を読みつづけている妻のほうへ立つてゆきながら、「せつかく旅に出てきたのに本ばかり読んでいる奴もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向いあいに腰かけて、そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した。

「だって、わたしなぞは、旅先きでもなければ本もゆつくり読

めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。

「ふん、そうかな」ほんとうを云うと、僕はそんなことには何も苦情をいうつもりはなかった。ただほんのちよつとだけでもいい、そういう妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分と一しよになつて、そこいらの山の端にまつしろな花を簇むらがらせている辛夷の木を一二本見つけて、旅のあわれを味つてみたかったのである。

そこで、僕はそういう妻の返事には一向とりあわずに、ただ、すこし声を低くして言った。

「むこうの山に辛夷の花がさいているとき。ちよつと見たいものだね。」

「あら、あれをござらんにならなかつたの。」妻はいかにもうれしくつてしようがないように僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いていたのに。……」

「嘘をいえ。」こんどは僕がいかに不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでいたって、いま、どんな景色で、どんな花がさいているかぐらいはちゃんと知っていてよ。

……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずっと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさえぎって山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処には、そう言われてみて、やつと何か白っぽいものを、ちらりと認めたような気がしたただけだった。

「いまのが辛夷こふしの花かなあ？」僕はうつけたように答えた。

「しようのない方ねえ。」妻はなんだかすつかり得意そうだった。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木々はなかなか見あたらないらしかつた。僕たちがそうやって窓に顔を一しよにくつつけて眺めていると、目まなかないの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとぼちりのようなものがちらちらと舞っているのが見えていた。

僕はもう観念して、しばらくじっと目をあわせていた。とうと

うこの目で見られなかった、雪国の春にまつさきに咲くというその辛夷の花が、いま、どこぞの山の端にくつきりと立っている姿を、ただ、心のうちに浮べてみていた。そのまつしろい花からは、いましがたの雪が解けながら、その花の雫しずくのようにぼたぼたと落ちていくにちがいがなかった。

浄瑠璃寺の春

この春、僕はまえから一種の憧れをもっていた馬酔木あしびの花を大

和路のいたるところで見ることができた。

そのなかでも一番印象ぶかったのは、奈良へ著いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていた蒲公英たんぽぽや薺なずなのような花にもひとりでに目がとまって、なんとなく懐かしいような旅びとらしい気分で、二時間あまりも歩きつづけたのち、漸やつとたどりついた浄瑠璃寺の小さな門のかたわらに、丁度いまをさかりと咲いていた一本の馬酔木をふと見いだしたときだった。

最初、僕たちはその何んの構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに危く其処を通りこしそうになった。その途端、その門の奥のほうの、一本の花ざかりの緋桃ひももの木の上えに、突然なんだかはっとするようなもの、——ふいとそのあたりを翔かけ去さったこ

の世ならぬ美しい色をした鳥の翼のようなものが、自分の目には
いつて、おやと思つて、そこに足を止めた。それが浄瑠璃寺の塔
の錆さびついた九輪くりんだったのである。

なにもかもが思いがけなかった。——さつき、坂の下の一軒家
のほとりで水菜を洗っていた一人の娘にたずねてみると、「九体くた
寺いじやったら、あこの坂を上りなはつて、二丁ほどだす」と、そこ
の家で寺をたずねる旅びとも少くはないと見えて、いかにもはき
はきと教えてくれたので、僕たちはそのかなり長い急な坂を息を
はずませながら上り切つて、さあもうすこしと思つて、僕たちの
目のまえに急に立ちあらわれた一かたまりの部落とその菜畑を何
気なく見過ごしながら、心もち先きをいそいでいた。あちこちに

桃や桜の花がさき、一めに菜の花が満開で、あまつさえ向うの藁屋根わらやねの下からは七面鳥の啼なきごえさえのんびりと聞えていて、——まさかこんな田園風景のまつただ中に、その有名な古寺が——はるばると僕たちがその名にふさわしい物古りた姿を慕いながら山道を骨折ってやってきた当の寺があるとは思えなかったのである。……

「なあんだ、ここが浄瑠璃寺らしいぞ。」僕は突然足をとめて、声をはずませながら言った。「ほら、あそこに塔が見える。」

「まあ本当に……」妻もすこし意外なような顔つきをしていた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね。」

「うん。」僕はそう返事ともつかずに言ったまま、桃やら桜やら

また松の木の間などを、その突きあたりに見える小さな門のほうに向つて往つた。何処かでまた七面鳥が啼いていた。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、はいりかけながら、「ああ、こんなところに馬酔木が咲いている。」と僕はその門のかたわらに、丁度その門と殆ど同じくらいの高さに伸びた一本の灌かんぼく木がいちめんめんに細かな白い花をふさふさと垂らしているのを認めると、自分のあとからくる妻のほうを向いて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」妻もその灌木のそばに寄つてきながら、その細かな白い花を仔細しさいに見ていたが、しまいには、なんとということもなしに、そのふっさりふっさりと垂れた一

と塊りを掌のうえに載せたりしてみている。

どこか犯しがたい気品がある、それでいて、どうにでもしてそれを手折って、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。云わば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずつと意味ぶかかった万葉びとたちに、ただ綺麗なだけならもつと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ。——そんなことを自分の傍でもつてさつきくらいいかにも無心そうに妻のしだしている手まさぐりから僕はふいと、思い出していた。

「何をいつまでもそうしているのだ。」僕はとうとうそう言いながら、妻を促した。

僕は再び言った。「おい、こっちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古そうな池ね。」妻はすぐついて来た。「あれはみんな睡蓮ですか？」

「そうらしいな。」そう僕はいい加減な返事をしながら、その池の向うに見えている阿弥陀堂あみだどうを熱心に眺めだしていた。

阿弥陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六七の、ジャケット姿の少女だった。

うすぐらい堂のなかにずらりと並んでいるこんじき金色のくたいぶつ九体仏を一わたり見てしまうと、こんどは一つ一つ丹念にそれを見はじめている僕をそこに残して、妻はその寺の娘とともに堂のそとに出て、陽あたりのいい縁さきで、裏庭の方かなんぞを眺めながら、こんな会話をしあっている。

「ずいぶん大きな柿の木ね。」妻の声がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意そうだ。
「何本あるのかしら？ 一本、二本、三本……」

「みんなで七本だす。七本ですが、沢山に成りまつせ。九体寺の柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やります。あてが一人でも※いで上げるのだすがなあ、そのとき

のせわしい事やったらおまへんなあ。」

「そうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

「ほんまに、秋にまたお出でなはれ。この頃は一番あきまへん。なあも無うて……」

「でも、いろんな花がさいていて。綺麗ね……」

「そうです。いまはほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲あやめ

の咲くころもよろしいおまつせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかせまつせ。……」そ

う言いながら、急に少女は何かを思い出したようにひとりごちた。

「ああ、そやそや、葱ねぎとりに往かにやならんかった。」

「そうだったの、それは悪かったわね。はやく往つてらっしやい

よ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それから二人は急に黙ってしまっていた。

僕はそういう二人の話を耳にはさみながら、九体くだいぶつ仏をすつかり見おわると、堂のそとに出て、その縁さきから蓮池のほうをいっしょに眺めている二人の方へ近づいていった。

僕は堂の扉を締めに行った少女と入れかわりに、妻のそばになんということもなしに立った

「もう、およろしいの？」

「ああ。」そう言いながら、僕はしばらくぼんやりと観仏に疲れた目を蓮池のほうへやっていた。

少女が堂の扉を締めおわつて、大きな鍵を手にしながら、戻つてきたので、

「どうもありがとう。」と言つて、さあ、もう少女を自由にさせてやろうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまつせ。」少女は池の向うの、松林のなかに、いかにもさわやかに立っている三重塔のほうへ僕たちを促した。

「そうだな、ついでだから見せて貰おうか。」僕は答えた。「でも、君は用があるんなら、さきにその用をすましてきたらどうだい？」

「あとでもええことだす。」少女はもうその事はけろりとしてい

るようだった。

そこで僕が先きに立って、その岸べには菖蒲あやめのすこし生い茂っている、古びた蓮池のへりを伝って、塔のほうへ歩き出したが、その間もまた絶えず少女は妻に向って、このへんの山のなかで採れる筍たけのこだの、松茸まつたけだのの話をことこまかに聞かせているらしかった。

僕はそういう彼女たちからすこし離れて歩いていたが、実によくしゃべる奴だなあとおもいながら、それにしてもまあ何んという平和な気分がこの小さな廃寺をとりまいているのだろうと、いまさらのようにそのあたりの風景を見まわしてみたりしていた。

傍らに花さいている馬酔木あしびよりも低いぐらいの門、誰のしわざ

か仏たちのまえに供えてあつた椿の花、堂裏の七本の大きな柿の木、秋になつてその柿をハイキングの人々に売るのがいかにも愉たのしいことのようにしている寺の娘、どこからかときどき啼なきごえの聞えてくる七面鳥、——そういう此のあたりすべてのものが、かつての寺だったそのおおかたが既に廃滅してわずかに残つていゝるきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら——というよりも、それらの古代のモニュメントをもその生活の一片であるかのようにさりげなく取り入れながら、——其処ひそにいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもその何処かにすこしく悲愴な懐古的気分を漂わせている。

自然を超えんとして人間の意志したすべてのものが、長い歲月

の間にほとんど廃亡に帰して、いまはそのわずかに残っているものも、そのもとの自然のうちに、そのものの一部に過ぎないかのように、融^とけ込^こんでしまうようになる。そうして其処にその二つのものが一つになって——いわば、第二の自然が発生する。そういうところすべての廃墟の云いしれぬ魅力があるのではないか？ ——そういうパセティックな考えすらも（それはたぶんジメルあたりの考えであつたらう）、いまの自分にはなんとなく快い、なごやかな感じで同意せられる。……

僕はそんな考えに耽^{ふけ}りながら歩き歩き、ひとりだけ先きに石段をあげり、小さな三重塔の下にたどりついて、その松林のなかから蓮池をへだてて、さっきの阿^あ弥^み陀^だ堂^{どう}のほうをぼんやりと見か

えしていた。

「ほんまになあ、しよむないとこでおまつせ。あてら、魚食うたことなんぞ、とんとおまへんな。蕨わらびみてえなものばかり食つてんのや。……筍は好きだつか。そうだつか。このへんの筍はなあ、ほんまによろしうおまつせ。それは柔やわうて、やわうて……」

そんなことをまた寺の娘が妻を相手にしゃべりつづけているのが下の方から聞えてくる。——彼女たちはそうやって石段の下で立ち話をしたまま、いつまでたつてもこちらに上がつて来ようともしない。二人のうえには、何んとなく春めいた日ざしが一ぱいあたっている。僕だけひとり塔の陰にはいつているものだから、すこし寒い。どうも二人ともいい気もちそうに、話に夢中になつ

て僕のことなんぞ忘れてしまっているかのようだ。が、こうして
廃塔といっしょに、さつきからいくぶん瞑想的めい、そうてきになりがちな僕
もしばらく世間のすべてのものから忘れ去られている。これもこ
れで、いい気もちではないか。——ああ、またどこかで七面鳥の
やつが啼いているな。なんだか僕はこのまますこし気が遠くなっ
てゆきそうだ。……

その夕がたのことである。その日、浄瑠璃寺から奈良坂を越え
て帰ってきた僕たちは、そのまま東大寺の裏手に出て、三月堂を

おとずれたのち、さんざん歩き疲れた足をひきずりながら、それでもせつかく此処まで来ているのだからと、春日かすがの森のなかを馬酔木の咲いているほうへほうへと歩いて往つてみた。夕じめりのした森のなかには、その花のかすかな香りがどことなく漂つて、ふいにそれを嗅かいだりすると、なんだか身のしまるような気のするほどだった。だが、もうすっかり疲れ切つていた僕たちはそれにもだんだん刺戟しげきが感ぜられないようになりだしていた。そうして、こんな夕がた、その白い花のさいた間をなんとすることもなしにこうして歩いて見るのをこんどの旅の愉しみにして来たことさえ、すこしももう考えようともしなくなっているほど、——少くとも、僕の心は疲れた身体とともにぼおつとしてしまっていた。

突然、妻がいった。

「なんだか、ここの馬酔木と、浄瑠璃寺にあつたのとは、すこしちがうんじゃない？ ここのは、こんなに真つ白だけれど、あそこのはもつと房が大きくて、うっすらと紅味を帯びていたわ。……」

「そうかなあ。僕にはおんなじにしか見えないが……」僕はすこし面倒くさそうに、妻が手ぐりよせているその一枝へ目をやっていったが、「そういえば、すこうし……」

そう言いかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にぼおつとしている心のうちに、きょうの昼つかた、浄瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人でその白い小さな花

を手にとりあつて見ていた自分たちの旅すがたを、何んだかそれ
がずっと昔の日の自分たちのことでもあるかのような、妙なな
つかしきでもつて、鮮やかに、よみがえ蘇らせ出していた。

櫓の上にて

その小屋のなかで待つていてくれと云われるまま、しばらく
五六人のぎよしや馭者らしい人たちの間に割りこんで、手もちぶさたそ
うに炉の火にあたっていたが、みんなの吹かしている煙草にむせ

て急に咳が出だしたので、僕は小屋のそとに出て行って、これから自分のはいってゆこうとする志賀山の案内図をながめたり、小さな雪がちらちらとふっているなかを何んとなく歩いてみたりしていた。雪の質は乾いてさらさらとしているし、風もないので、零下何度だか知らないけれど、寒さはそうひどく感ぜられなかった。そのうちに、向うの厩うまやの中から、さいぜんの若い馭者が馬の口をとりながら、一台の雪橇ゆきぞりを曳き出して来るのが見えた。僕は雪橇ゆきぞりというものはじめて見た。——粗末な箱型をしたものに、幌ほろとはほんの名ばかりの、継ぎはぎだらけの鼠ねずみいろの布おほを被おほつただけのものである。馭者台ぎよしゃだいなんでもない。それもそのはず、馭者は馬のさきに立って雪のなかを歩いてゆくのである。

その櫓が自分の前に横づけになつたものの、どこから乗つてい
いのか分らないでまごまごしていると、馭者が飛んできて、幌
をもちあげながら入口をあけてくれた。ふとそのなかに莫塵ごごぎの敷
いてあるのが目にとまつたので、僕はいそいで靴をぬぐうとする
と、その儘ままあがれという。そこで僕はほんのまね事のように外がいと
套うを叩いたり、靴の雪を払い落したりして、首をこごめるよう
にして幌の中にはいった。そのなかにはまあ二人で差し向いに腰か
けるのがやつと位だが、そこには座蒲団ざぶたんや毛布から、火鉢の用意
までしてある。火鉢には火もどつさり入れてある。——寒いから、
その火鉢に足をのせて、その上からその毛布をかけよと云つてく
れる。そう云うとおりに、僕がそこにあつた毛布をひろげて膝の

上にかけて出すのを見とどけると、馭者は幌をすつかり下ろして、馬のほうへ飛んでいった。

やがて雪橇はごんごんと動き出した。あまり揺られ心ちのいいものではなかった。それに幌には窓が一つもついていないので、全然おもての景色の見られないのが何よりの欠点だ。——このままこうしてごんごんと揺られながら、毛布の中に小さくなっていたんでは、いくら寒さはしのげても、なんにも見えず、わざわざ雪のなかまでやってきたかいが無い。そこで幌を少しも

ち上げてみたが、その位のことでは、道ばたに積みあげられた雪のほかは何んにも見えない。……

が、さつきから首すじがすこし寒いとはおもっていたが、そのところだけ幌の布がなんだかほころ綻んだようになっていて、ひらひらしているのはじめて気がついた。ためしにそれをちよつと手でもち上げて見ると、小さな窓のような工合になる。僕はこれはいいとおもって、そこに目を近づけると、ちようど村の一番最後の家らしい、なかば雪に埋もれた一軒の茶店のようなものを通り過ぎた。ちよつとの間だったのに、もうさうとう雪が深そうだ。

そのうちにあちこちの森だの山だのが見えて来る。細かい雪がいちめんめんにふりしきっているので、それもほんの近いものだけし

か見えなかつたが。……それでも、僕は自分が生れて初めて見るような雪の山のなかにはいり出していることを感じだしていた。だが、そうやって外ばかり眺めていると、そこから細かい雪がたえず舞いこんでくるとみえ、膝のうへの毛布がうっすら白くなっている。僕はその毛布を軽くはたきながら、すこし坐りなおして、しばらく目を休めることにした。なんにも見えなくとも、自分の身体のかしぎかたで、上りが急になったり、また、すこし楽になったりしてゆく工合がよく分かる。なんだか自分の不安定な感じが或る度を過してくると、櫓のほうもいつか止まってしまっている。馬が息をつくためにしばらく休むのである。雪の中にぽつんぽつんと立っている樹木なんぞを見ても、四方から雪を吹きつけ

られているので、どのくらい雪が深いのだからちよつと見当がつかない。橇道はちゃんといっているらしいが、ずっと上りづめらしく、馬も、馭者も、ずいぶん骨を折っているのだらうと思つた。

又、橇がとまつた。こんどはだいぶ長くとまつているな、と思つてみると、雪の中から急におもいがけない話しごえが聞えだした。どうやら向うから下りてくる雪橇があつて、道をゆずりあつてゐるらしい。——「まだあとからも来るか」と向うの馭者が問うと、

「いや、もうこれが最後だ」とこちらの馭者が答えている。……そのうち僕の橇が動きだして向うの橇とすれちがおうとするとき、突然、向うの馭者が何かはげしく自分の馬を叱したので、ひよい

と例の穴からのぞいて見ると、道を避けようとして片がわの積雪のなかへ深くはいり込んでしまった橇を曳き出そうとして、一しよう懸命になってゐる馬は、ほとんど胸のあたりまで雪に埋つていた。なんども前脚を雪のなかから引き抜こうとしてば、そこらじゆうに雪煙りをちらしていた。僕もそのとばうちりを受けそうになつて、いそいで顔をひっこめたが、向うの橇はすつぽりと幌を下ろしてはいるものの、空のようだった。

続いて、もう一台の橇とすれちがつた。こんどはどうやらうまくすれちがつたようだったが、それも空らしかった。

そうやって二台の橇とすれちがつて、しばらくしてから僕はふいと時計を出してみると、橇に乗ってから一時間ばかりも経つて

いるので、ああ、もうこんなに乗っていたのかと意外におもいながら、一体、いまどのへんなのだろうと、又、例の穴に顔を近づけてみると、ちょうど自分の櫓の通っている岨そばの、ずっと下のほうの谷のようなところを二台の櫓がずんずん下りてゆくのが、それだけが唯一の動きつつあるものとして、いかにもなつかしげに見やられた。それにしても、あれがいましたがた自分とすれちがった櫓かとおもわれる位、そんなにもう下のほうまで往っているのには驚いた。そうしてそれと共に、僕ははじめて自分のいつのまにかはいり出している山の深さに気がついてきた。それほど自分のそれまでの視野のうちには、いつまで経っても、同じような白い山、同じような白い谷、同じような恰好かっこうをした白い木立しか

はいつて来ないでいたのだった。

僕はそれから櫛のなかに再び坐りなおして、がたんがたん揺られるがままになりながら、いよいよ自分も久恋の雪の山に来てい
るのだなおもった。ずいぶん昔から、いまのように、こうして
ただ雪の山のなかにいること、——それだけをどんなに自分は欲
して来たことだろう。べつに雪の真只中でどうしようというので
もない。——スポルティフになれない弱虫の僕は、ただこういう
雪の中にじっとして、真白な山だの（——そう、山もそんなに大

それたものでなくとも、丁度いま自分の前にあるような小品風なものでもいい……)、真白な谷だの(——谷もあの谷で結構……)、雪をかぶったいくつかの木立のむれ(——あそこに立っている櫓かばのような木などはなかなか好いではないか……)などをぼんやり眺めてさえいればよかった。

ただすこし慾をいえば、ほんの真似だけでもいい、——真白な空虚にちかい、このような雪のなかをこうして進んでいるうちに、ふいと馭者も馬も道に迷って、しばらく何処をどう通っているのだか分からなくなり、気がついてみると、同じところを一まわりしていたらしく、さつきと同じ場所に出ている——そんな純粹な時間がふいと持てたらどんなに好かろう、とそんな他愛のないこ

とだけが願わしいような、淡々とした気もちでいた。……

僕は目をつぶって、幌の穴から見ようとすれば見えたでもあろう、そのような雪の世界をただ想像裡そうぞうりに描きつづけながら、こういう自分の雪に対するそれほど烈しくもない、といって一時の気まぐれでもない、長いあいだの思慕のようなものが、いつ、どうして自分のなかに生じて来たのだろうかと考え出していると、突然、十年ほどまえ八つが岳ふもとの麓にあるサナトリウムで生を養っていた自分のすがたが鮮かにより返ってきた。冬になると、山麓さんろくのサナトリウムのあたりは毎日ただ生氣なく曇っているだけなのに、山々はいつも雪雲で被われており、そんな雲のないときには、それらの山々は見事なほど真白なすがたをしていた。僕

はそんな冬の日をどうしようもなしに暮らしながら、ときどき雪の山のほうへ切ない目ざしを向けるようになり出していた。そんな雪雲にすっかり被われている山のもなかを、なにか悲壮な人間の内部でも見たいように、おそるおそる見たがりながら。……

僕は、いま、その頃の自分にはとても実現せられそうもないように見えていた、こんな雪の中にはいり込んで来ているのだと思いながら、さて、べつにどうという感慨もなかった。悲壮のようなものはいささかも感ぜられなかった。寒さだって大したことはない。むしろ、雪のなかは温かで、なんのものの音もなく、非常に平和だ。そう、愉^{たの}しいといったほうがいい位だ。櫛^{そり}の中にいて、小さな幌^{ほろ}の穴から、空を見あげていると、無数の細かい雪がしつ

きりなしに、いかにも愉しげな急速度でもって落ちてくる。そうやってなんの音も立てずに空から落ちてくる小さな雪をじいつと見入っていると、その愉しげな雪の速さはいよいよ調子づいてくるようで、しまいにはどこか空の奥のほうでもって、何かごおつという微妙な音といっしょになってそれが絶えず涌わいているような幻覚さえおこってくるようだ。

大きな壺に耳をあてていると、その壺の底のほうからごおつといてて無数の音響が絶えまなしに涌きあがっている。——ちやうどああいった工合に何か愉しくて愉しくてならないように、無数の小さな雪が空の奥のほうで微妙にごおつという音を立てながら絶えず涌わいているような気がせられるのである。僕はいつまでも

一ところからじつと、絶えず落ちてくる雪を見ている中に、そんな幻覚的な気もちにさえなり出していたが、急にまた坂にさしかかったと見えて櫓ががたんがたん揺れだしたので、思わず自分自身に立ち返えされてしまっていた。

……雪のごとく愉しかれ。

大いなる壺のやすらかに閉ざされし内部に在りて、

すべての歌声の、よろこばしきアルペジオとなりて、

絶えず湧きあがるがごとくにあれ。

そうしてそういうノワイユ夫人の詩の一節だけが、いつまでも

自分の口の裡うちに、なにか永遠の一片のように残っていた。……

「死者の書」

古都における、初夏の夕ぐれの話

客　なんともいえず好い気もちだね。すこし旅に疲れた体をやすめながら、暮れがたの空をこうやって見ているのは。

主　京都もいまが一番いいんだ。この頃のように澄み切った空

のいろを見ていると、すっかり京都に住みついていて僕なんぞも、なんだかこう旅さきにいるような気がしてきてならないね。まあ、そういう気もちになるだけでもいいからな……それにしても、君はこの頃はよくこちらの方へ出てくるなあ。いつか話していた仕事はその後はかどっているのかい。何か、大和のことを書くとかいつていたが……

客 いや、あれはあのままだ。なかなか手がかりがつかないんだ。まあ、そのうち何んとかものにするよ。……なんしろ、まだ、こういった感じのものが書きたいと、埴輪はにわをいじったり、万葉の歌を拾い読みしたりしては一種の雰囲気ふんいきを自分のまわりに漂わせて、ひとりでいい気になっているぐらいのものだ。

……当分はまあ折を見ては、こうやってこちらに来て、できるだけ屢々しばしばみごとな田園と化した都みやこ址あとや、西の京あたりの松林のなかなどをぶらぶらするようにしている。

主 そうやって君は何げなさそうにぶらぶらしながら、突然、松林の奥から古代の風景が君の前にひらけるような瞬間を待つているわけなのだね。

客 そうだよ。少くとも、はじめのうちはそうだった。だが、このごろはそういういた奇蹟あきりは詮あきりめている。まだ、自分には古代の研究がなにひとつ身につけていないのだからね。もうすこしおとなしく勉強をする。

主 だが、こんなことを僕から君に云うのもどうかと思うけれ

ど、小説を書く気なら、あんまり勉強しすぎてしまってもいけないのではないかしら。ゲエテも、どこかで、こんなことを云っている。『自分はギリシヤ研究のおかげで「イフイゲニエ」を書いたが、自分のギリシヤ研究はすこぶる不完全なものだった。もしその研究が完全なものだったら、自分の「イフイゲニエ」は書かれずにしまったかも知れない。』

客 うん、なるほどね。つまり、古代のことは程よく知っている位で、非常にういういしい憧れをもっているうちのほうが小説を書くのにはいいということになるわけか。これは好い言葉をきいた。……どうもこのごろ、自分でも悪い癖がついたとおもい出していたところだ。日本の古代文化の上にもはつきりした痕を印あと

しているギリシヤやペルシヤの文化の東漸ということを考えてみているうち、いつか興味が動きだしてギリシヤの美術史だとか、ペルシヤの詩だとか読み出している。それはまだいい、そのうちにいつのまにかゲエテの「デイヴァン」だとか、ノワイユ夫人の詩集までが机の上にもち出されているといった始末だ。

主 （同情に充ちた笑） まあ、ゆっくりでもいいから、あまり道草をくわずに、仕事に精を出したまえ。……そういえば、数年まえに釈迢空さんが「死者の書」というのを書いていられたではないか、あの小説には実によく古代の空気が出ていたようにおもうね。

客 そう、あの「死者の書」は唯一の古代小説だ。あれだけは

古代を呼吸しているよ。まあ、ああいう作品が一つでもあつてくれるので、僕なんぞにも何か古代が描けそうな気になつてゐるのだよ。僕ははじめて大和の旅に出るまえに、あの小説を読んだ。

あのなかに、いかにも神秘的な姿をして浮かび上がつてゐる葛城かつらぎの二上山ふたがみやまには、一種の憧れあくがさえいだいて来たものだ。そうして

或る晴れた日、その麓ふもとにある当麻寺たぎまでらまでゆき、そのこごしい山を何か切ないような気もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村々を遠くにながめながらぶらぶらしていたこともあつた。

主 その二上山だ。その山に葬られた貴い、お方の亡き骸ながらがらが、塚のなかで、突然深いねむりから村びとたちの魂たまご乞いによつて呼びさまされるあたりなどは、非常に凄かつたね。森の奥の、塚の

まつくらな洞のなかの、ぼたりぼたりと地下水が巖づたいにしたたり落ちてくる湿っぽさまだが、何かぞつとするように感ぜられた。

客 全篇、森厳なレクキエムだ、古代の埃^{エジプト}及びとの数種の遺文に与えられた「死者の書」という題名が、ここにも実にいきいきとしてゐる。

主 毎日の写経に疲れて、若い女主人公がだんだん幻想的になって来、ある夕方、日の沈んでゆく西のほうの山ぎわにふと見知らない貴いおかたの^{おもかげ}梯を見いだすところなども、まだ覚えている。

客 あの写経をしている若い女のすがたは美しいね。僕はあそこを讀んでからは女の手らしい古い写経を見るごとに、あの藤原

の郎女いらつめの氣高くやつれた容ようす子をおもい出して、何んとなくなつ
かしくなる位だ。

主 あの小説には、それからもう一つ、別の興味があつた。大お
おともおとものやかもち

伴家特だ。柳の花の飛びちつてすざくおおしいる朱雀大路を、長安かなん

ぞの貴公子然として、毎日の日課に馬を乗りまわしている兵部ひょうぶ

大輔たいふの家持のすがたは何んともいえず愉たのしいし、又、藤原仲麻

呂かまろがその家持と支那文学の話などに打ち興たのじながら、いつか話

題がちかごろ仏教に帰依した姪いらつめの郎女のうえに移つてゆく会話
なども、いかにもいきいきとしていたな。

客 そういうところに作者の底力がひとりひとりりでに出ている。人間
として大きな幅のある人だ。

主 一方、万葉学者としてもっとも独創に富んだ学説をとнаえてきた、このすぐれた詩人が、その研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うたところに、あの作品の人性ユマニテがあるのだね。だが、どうしてあれほどのものが世評に上らなかつたのだろう。

客 世間はそういう仕事は簡単にディレツタンティズムとしてかたづけてしまうのだ。学界の連中は、こんどは小説という微妙な形式なので、読まずともいいとおもつたろうし……本当にこの作品を読んだという人は、僕の知っている範囲では、五人とはいなかつたものね。

主 僕などもその一人だつたわけか。幸福なる少数者の……しかし、それはそれだ。君もいい仕事をしてくれたまえ。いい読者

になつてあげるから。

客　こんどはこつちに風が向いてきたな。まあ、もうすこし待
つてくれ。まだ自分でもしようがないとおもうのは、大和の村々
を歩いていると、なんだかこう、いつもお復習さらいをさせられている
ような気もちが抜けな^いことだ。もうすこし何処どこにいるのだからも
忘れたようになつて、あるときは初夏の風にふかれながら、ある
ときは秋の雲をみあげながら、ぼんやりと歩けるようになりたい。
——心におそろしげに描いてきた神々のいられた森が何かつまら
ない小山に見えるきりだったり、なにげなく見やつていた或る森
のうえの塔に急に心をひかれ出して暑い田圃たんぼのなかを過ぎつてい
つたり、或る大寺の希臘風ギリシアふうなエンタシスのある丹にのはげた円柱

を手で撫でながら、目のあたりに見る何か大いなるものの衰えおとろに胸をお押しつぶされたり、そうかとおもうと、見すてられたような廃寺の庭の夏草の茂みのなかから拾い上げた瓦かわらがよく見ると明治のやつだったりして、すっかりへとへとになって、日ぐれ頃、朝からみると自分の仕事からかえって遠のいた気もちになって帰ってくることが多いのだ。

主 そういった君の日々が、そのまま君の小説になるのではないか。

客 いや、もうそういう苦しまぎれのような仕事はこんどだけはしたくない。もつと、こう大どかな仕事ぶりをしてみたいんだ。だが、僕みたいなものには難しいことらしいな。——あれは、お

ととしの秋だったかな、ともかくもまあ小手しらべにと、何か小品を、ちようど古代の人々がふいとした思いつきで埴輪はにわをつくりあげたような気もちで、書いてやろうとおもって、古代の研究がてら、大和にやってきて、毎日寺々を見て歩いているうちに、なんだか日にまし気もちが重くるしくなつて、とうとう或る夕方、もうその仕事をどう云つてやつてことわろうかと考えるため散歩にいった高畑のあたりの築土ついでじのくずれが妙にそのときの自分の気もちにぴったりして、それから急に思いついて「曠野あらの」という中世風なものがないしい物語を書いた。

主 あの小説は読んだよ。大和までわざわざ仕事をしにきて、毎日お寺まわりしながら、やっぱり、ああいうものを書いてい

なんて、いかにも君らしいとおもったよ。

客 あれは、いまおもえば、僕のさびしい詮あきらめだった。それが何処かで、あの物語の女のさびしい気もちと触れあっていたのだな……

主 そういえばそうもいえようが、あれもあれでいい。だが、僕は君の新らしい仕事を期待している。勇気を出して、いつまでもその仕事をつづけてくれたまえ。

客 うん、ありがとう。ひとつ一生をかけてもやるかな。……それまでのうちに、これから何遍ぐらいこつちにやって来ることになるかな。どうも大和のほうに住みつこうなんという気にはなれない。やっぱり旅びととして来て、また旅びととして立ち去っ

てゆきたい。いつもすべてのものに対してニイチエのいう「遠パトス
隔デル・デイス・スタンツの感じ」を失いたくないのだ。……

そのくせ、いつの日にか大和を大和ともおもわずに、ただ何ん
となくいい小さな古ふるくに国だとおもう位の云い知れぬなつかしきで
一ぱいになりながら、歩けるようになりたいともおもっているの
だ。たわわに柑かんきつ橘類つるいのみのつた山裾をいい香りをかいで歩きな
がら、ああこれも古墳のあとかなと考え出すのは、どうもね。

主　しかし、君はもう大抵大和路は歩きつくしたろうね。

客　割合に歩いたほうだろうが、ときどきこんなところだと、
——本当に思いがけないような風景が急に目のまえにひらけ出す
ことがある。

この春も春日野かすがのの馬酔木あしびの花ざかりをみて美しいものだとおもったが、それから二三日後、室生川むろうがわの崖のうえにそれと同じ花が真っ白にさきみだれているのをおやと思つて見上げて、このほうがよっぽど美しい気がしだした。大来皇女おおくのひめみこの挽歌ばんかにある「石いそのうへに生おふる馬酔木あしびを手折らめど……」の馬酔木はこれではなくてはとおもつた。そういう思いがけない発見がときどきあるね。まあ、そんなものだけをあてにして、できるだけこれからも歩いてみるよ。——だが、まだなかなか信濃の高原などを歩いて、道ばたに倒れかかっている首のもぎとれた馬頭観音などをさりげなく見やつて、心にもとめずに過ぎてゆく、といったような気軽さにはいかない。……

それでいて、そのふと見過ごしてきた首のない馬頭観音の像が、何かのはずみで、ふいと、そのときの自分の旅すがたや、そのまわりの花^{はなすすき}薄^はや、その像のうえに青空を低くさらさらと流れていた秋の雲などと一しよになって、思いがけずはつきりと蘇^{よみがえ}ってくるようなことがあつたりする工合が、信濃路ではたいへん好かつた。なんだか、そういつたうつけたような気分で、いつの日か、大和路を歩けるようになりたいものだ。

主　いい身分だね。そうやって旅行ばかりしていられるなんて。客　君なんぞにもそう見えるのかい。でも、僕はこんな弱虫だからね、不安な旅でない旅などをしたことはない。いつ、どこで、寝こむかも分からないような心細さで、旅に、出てくるのだよ。

まあ、それなりにだんだん旅慣れてはきたけれど。……

主　　そうか。あんまり無理をするなよ。——ああ、もうすつかり暗くなってしまったね。すこし冷え冷えとしてきたようだから、窓をしめようね。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房

1977（昭和52）年11月30日初版第1刷発行

初出：「大和路・信濃路」は「樹下」「十月」「古墳」「斑雪」
「辛夷の花」「浄瑠璃寺」「橿の上にて」「死者の書」の八篇か
ら成る。

「樹下」：「文藝」

1944（昭和19）年1月号

「十月（一）」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「一」として。）

1943（昭和18）年1月号

「十月（二）」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「二」として。）

1943（昭和18）年2月号

「古墳」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「三」として。）

1943（昭和18）年3月号

「斑雪」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「野辺山原」として。）

1943（昭和18）年4月号

「櫓の上にて」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の

「雪」として。）

1943（昭和18）年5月号

「辛夷の花」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「辛

夷の花」として。）

1943（昭和18）年6月号

「浄瑠璃寺の春」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の

「浄瑠璃寺」として。）

1943（昭和18）年7月号

「死者の書」：「婦人公論」（「大和路・信濃路」の「死

者の書」として。))

1943 (昭和18) 年8月号

一部所収単行本：「曠野」養徳社（「死者の書」 「斑雪」 「橿の上にて」の3篇所収）

1944 (昭和19) 年9月20日

一部所収単行本：「花あしび」青磁社（「樹下」 「十月」 「古墳」 「浄瑠璃寺の春」 「死者の書」の5篇所収）

1946 (昭和21) 年3月15日

一部所収単行本：「堀辰雄小品集・繪はがき」角川書店（「斑雪」 「橿の上にて」 「辛夷の花」の3篇所収）

1946 (昭和21) 年7月20日

全編初収単行本：「大和路・信濃路」人文書院

1954（昭和29）年7月5日

※筑摩全集版の底本は、「樹下」「十月」「古墳」「浄瑠璃寺の春」「死者の書」は「花あしび」青磁社。「斑雪」「櫛の上にて」は「曠野」養徳社。「辛夷の花」は「堀辰雄小品集・繪はがき」角川書店版。加えて、「大和路・信濃路」人文書院を参考にして
いる。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房、1977（昭和52）
年11月30日、解題による。

入力：kompass

校正：松永正敏

2004年2月27日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大和路・信濃路

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>